

# 郷

平成元年  
4月号

# 友

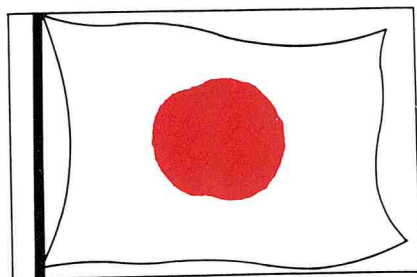
1989  
April

昭和三十年七月八日 第三種郵便物認可  
平成元年四月一日 毎月一回 一日発行  
第三十五卷第四号 (通巻四一〇号)



—自然美散策(津軽の早春)—(解説表2下段)

# 新会長の下 新年度に向い 邁進しよう



## 表紙写真の解説

写真家 宝蔵寺 忠

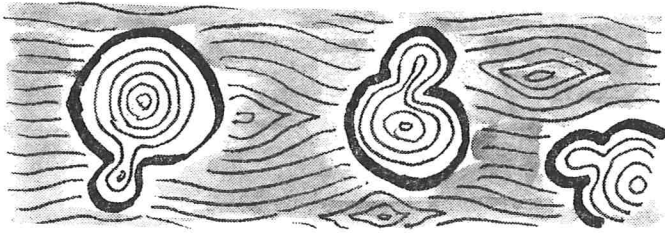
——自然美散策（津軽の早春）——

——青森県弘前市下白銀町所在——

「……弘前は決して凡庸なまちではないと思つたと太宰治がその著書『津軽』の中に書いているように、心のふるさと、魂のよりどころとして津軽人が親しんできた町弘前は、城ができ、町割りがなされてから三六〇年以上、城とともに息づいてきた。

戦国時代、豊臣秀吉から藩祖と認められた津軽為信が築城を計画し、二代信牧が慶長十六年（一六一一）に完成した平山城で、外濠の内側が弘前公園となっている。弘前城は広い意味で弘前を中心的存在で、位置も町の中心にあり、雄大な岩木山を指呼の間に眺望できる絶好の憩いの場所となっている。城が公園として開放されたのは明治二十七年（一八九四）のことで、その時に地元の人たちの奉仕により五、〇〇〇本の桜が植えられ、それが今日では大木となり津軽に春を告げる桜で埋まる城として日本一の盛名を馳せている。この弘前公園がもつともぎわうのは、桜が開花する四月下旬から五月初めまでのさくらまつりの時期で、期間中に訪れる花見客は二五〇万人以上となり、桜の弘前城の名に恥じぬ盛況である。早春の城を彩る桜の花は、雪に閉ざされた長い冬がようやくやくにして終つたという解放感に満ち、津軽地方に活気がみなぎり、まもなく花開くりンゴへと引きつがれていく。

郷友目次(4月号)



巻頭言……………	堀江 正夫(3)	(2)
会長就任の挨拶……………	編集部(5)	
講演要旨「大東亜戦争は日本が仕掛けた侵略戦争か」について……………	杉田 一次(15)	
政治家へー国家安全保障に関する提言(一)……………	斎藤 忠(23)	
中ソ接近の動きの中のアジア・太平洋世界……………	佐藤 文夫(27)	
軍事常識ー空母物語(一)……………	狩野 信行(29)	
現代に見る間接侵略・革命(十二)……………	訳者・柏木 明(33)	
「サイレント・ミッション」(八)……………	扇 貞雄(38)	
共産圏動向研究所役員懇談会記念講演要旨……………	矢部 廣武(40)	
「韓国国立墓地」紹介……………	佐々木信四郎(45)	
郷土の城(二十一)……………		
郷友基金応募十万元以上のご芳名……………		
自衛隊だより……………		
新隊員の日(115)(え・柏木康武)……………	牧野 良祥(55)	
戦史物語ービルマの花吹雪(一)……………	森松 俊夫(56)	
地方だより(近畿連絡協議会・和歌山・静岡・鳥取)……………		
俳壇・歌壇・柳壇……………		
編集後記……………		



## 新しい前進

連盟はこの度、新しく第八代会長として参議院議員、堀江正夫氏を迎え、会員一同心から歓迎申し上げるとともに、全員一致団結、決意を新たにして、その使命達成のため前進することを誓うものである。

先づ、我々はこの際、連盟の原点に立つて連盟とは何かと言うことを考えてみよう。昭和三十一年、敗戦により国民が混沌の中にさまよっている時、連盟は愛國と祖国の再建を願う人々によって創立された日本民族の誇りと伝統を尊ぶ愛郷、愛國の同志の結集体であり、出身、経歴、性別の如何を問わず、天皇を中心とする祖国日本を支える柱の一つとなることを誓う国民精神団体であるとともに、その主張を強く政治に反映させるべく努力する国民運動団体である。連盟の使命と存在意義は時代の変遷にかかわらず、永久かつ不変であり、日本民族の生存と活力の源泉となるべきである。

タワ―前上院議員は、去る一月二十五日の議会証言で「占領時に日本に与えた憲法はグッドアイデアと思っていたが、現在はお粗末なアイデアと考えている。今や日本は米国の同盟国であり、憲法の枠内で更に防衛力を増強すべきである」と述べた。田沢防衛庁長官のこの発言に対する所見は誠に當を得たものであるが、他面、我々はこのような発言を許す憲法を何故今まで持っているかときわめて残念に思う。

占領体制の残滓未だ消えず、我々は自主憲法の制定、国家安全保障態勢の刷新強化、防衛思想の普及と防衛精神の振興、自衛隊に対する協力及び支援、自衛隊殉職者を含む英霊の顕彰、日米安保体制の強化及びアジア、太平洋地域における国際活動の展開等、より強力な活動を行い、一日も早く占領の残滓を一掃し、自主独立の基盤に立つて誇り高い日本を築き上げなければならないと信ずる。



## 会長就任の御挨拶

昭和天皇が、全国民の深い悲しみの中に崩御されましたことは、特にその生涯の大部を昭和に生きてきた私共にとって、真に万感胸に迫るものがあり、心から哀悼の誠を捧げたいと思います。同時に私共は、新しい天皇の平成の御代を迎えましたが、新しいこの時代が、真に平和で国運がますます進展することを希わずにはおられません。

このような重大な時、この度第三十四回通常総会において、伝統に輝やく日本郷友連盟の会長に、不肖私をご指名頂きましたことは、洵に身に余る光栄であります。

しかし、卒直に申して私は、浅学菲才のこの身に果して重要な会長の職を、皆様のご期待に応え、これを全うすることができるとかどうか、大きな不安と危惧を覚え、会長をお引受けすることを一応も二応も躊躇したのであります。

とは申すものの、私は戦後日本郷友連盟が創設されてから今日まで、尊敬する歴代会長の下諸先輩の皆様が、真の日本の創設顕現を目指した連盟創立の精神を体して、極めて困難な状況を克服しながら、営々として築いてこられましたご努力に対し、予てから心から共鳴しかつ敬意を表してきたところであり、私的にも

十二年前参議院全国区に出馬して以来、一貫して皆様から絶大なご厚情、ご支援を忝うしてまいりました。

このようなことを考えますと、折角皆様のご推薦を頂きながら、これをご辞退することは許されないの  
思いに立ち、遂に清水寺の舞台から飛び降りる思いで会長就任を決意した次第であります。

ご高承のとおり、極めて非徳徴力な私ではありますが、このうえは光輝ある当連盟の伝統を継承し、一層  
これを発展させるために、皆様のご意向を体しながら、誠心誠意渾身の努力を尽す決意であります。

何卒皆様方の絶大なご指導、ご支援を賜わりますよう心から願ってやみません。

最後に、皆様方のご健勝・ご多幸と当連盟の一層の発展を祈ってご挨拶と致します。

平成元年三月十七日

日本郷友連盟会長

参議院議員 堀江正夫

# 講演要旨 「大東亜戦争は日本が仕掛

## けた侵略戦争か」について

「郷友」編集部

### 一、お詫びと釈明

本誌一月号掲載の標記の三上照夫先生の講演要旨については、一部の読者から「コピーしてもっと多くの人に読んで貰おうと思っている」など、これに共鳴する声もありましたが、同時に数名の方から「中に述べてある個々の史実については事実無根又は疑問と思われるものが少なくない」との指摘が編集部に寄せられました。

年末匆忙の間、発行を急ぐあまり、個々の史実についての検証不十分のまま、送られて来た「歩一〇四記念講演特集号」をその儘転載したことによるもので、明らかに編集上のミスであり、深くその責任を感じ心からお詫び申し上げます。

茲に、指摘をいただいた「郷友」読者、大東塾不二歌道会の主宰者鈴木正男先生、並びに「パール博士の日本無罪

論」の著者田中正明先生の指摘論稿（要旨）を掲載してご諒承をお願いする次第であります。なお、指摘内容の重複するものは、鈴木、田中両先生のを主とし「一読者」の方は省略させて頂きました。

### 二、三上先生の講演要旨を読んで

「郷友」一読者

「郷友」一月号掲載の「大東亜戦争は日本が仕掛けた侵略戦争か」には、私もその場に居合わせたような気持にさせられ一気にこれを読み終えました。

今次大戦が日本にとって自存自衛の戦いであり、こちらから仕掛けた侵略戦争ではなかったという事実を、国民は、よく認識して、いわゆる「東京裁判史観」がもたらした自虐思想に基づく自信の喪失、卑屈および精神的頹廢の状態から起ち上るべきであり、また、それを進めて自主憲法を制定し、真に日本らしい日本にして次代に引き継ぐことこそ

戦中派に残された最後の仕事ではないか、との論旨と語り口には切々として胸を打たれるものがありました。

ただ、述べられている個々の事例については、事実と違うもの、また事実だろうかと疑問に思われるものがあります。恐らく、講師の思い違いか、録音および文章復原の際のミスによるものと思われませんが、このため誤解をする読者もあるいは出て来るのではないかとの全くの老婆心から、一応「これだけは」と思った事例に絞って気付いた点を挙げてみました。

なお、括弧内の「頁と段」は、当該事例の一月号における掲載場所であります。

## 第一、昭和天皇に関すること

### (一)独ソ戦（昭和十六年）への対応

講演要旨（以下単に講演という）では、ヒットラーが独軍のモスコウ攻撃を前にして関東軍のシベリア乱入を日本に要請してきたが、陛下は「信義を守れ」として遂にお許しにならなかった、とあります。（三十六頁上下）

独ソ開戦は十六年六月二十二日で、当初の独軍好調進撃の頃にはヒットラーから日本側の参戦を求めてきました。だが、独軍がモスコウに迫った頃には要請はありません。日本側では、当時の松岡外相が独ソ開戦の報に接するや単独に参内して「対ソ開戦」の要を奏上するなど、対ソ参戦論

者がいかなかったわけではありませんが、すでに陸海軍当局は「当分静観、北進はせず」との国策要綱案をまとめており、七月二日の御前会議でその儘決定をみています。したがって、陛下が「（日ソ中立条約の）信義を守れ」として「遂にお許しにならなかった」というような状況があったとは考えられません。

また、このこととは別に、陛下の基本的なお考えは、条約上の信義を守ることはもちろんですが、それよりも広く武力戦を拮据してはならないという点におありだったと拝されます。なお、講演中に数ヶ所「日ソ不可侵条約」の語が出てきますが、日ソ間の条約は「中立条約」です。

### (二)（ハル・ノート受領後の）御前会議

講演では、「これをもって最後通達宣戦布告に代える」という通知は、十一月二十五日にやって参りました」（三十四頁下）とあり、これを承けての御前会議で「武藤さん唯一人が陛下に迫り」開戦のご決意をお願いし、陛下はこの会議で「一人言のように『北海道をアメリカに割譲してでも和解の道はないか』とつぶやかれたことが記録にあります」（三十五頁上下）としていますが、どのような「記録」にあるのでしょうか。そのようなことがあったとは到底考えられません。

ハル・ノートの受領は十六年十一月二十七日で、その後



の御前会議といえは十二月一日ですが、ここでは「対米英蘭開戦ニ関スル件」が決定され、同日付で開戦決意の陸海軍大本営命令が発せられています。だいいち、御前会議の陪席者の武藤軍務局長が「陛下に迫る」などあろう筈がありません。また、日米交渉でアメリカが日本の領土割譲を求めてきたことなど一度もなく、陛下が「北海道割譲云々」など申されるわけがありません。

(三)陛下のマツカーサー訪問(編注、省略)

(四)陛下自決のご計画(編注、省略)

(五)御巡幸について(編注、省略)

## 第二、開戦経緯、外交交渉など

(一)日米開戦

講演で、日米戦争が米国の仕掛けたものであることは、欧米の学者、政治家等の文献に明らかである、(三十頁上下)としているのはそのとおりと思います。しかし、関連して挙げている事例の中で、「十二月十日を目標に東京湾に敵前上陸政行の命令を大統領は出したと、又事実でした」(三十五頁上)とあるのは無根です。

あるいは、十二月二日大統領が海軍作戦部長に直接指示し、アジア艦隊をして急遽百トン足らずの小型船三隻を徴発して軍艦に仕立て、タイ、マレー、インドネシア方面への進撃が予想される日本艦隊の前程に配して日本側の先制

砲撃を挑発させようとしたことと混同しているのかも知れません。(この計画は発動が十二月八日となったため、未発に終わりました)

(二)真珠湾攻撃

講演では、宣戦布告三五分前に日本軍が攻撃したとい、当時の米太平洋艦隊長官はロバート・シーボルト中将で「真珠湾の審判」を書いたとも述べています。(三十頁上下)

日本軍の攻撃は、最後通告後三〇分に開始という計画であったが、在米日本大使館側の不手際で最後通告の手交が遅れたため、通告約一時間前の攻撃となったというのが実情です。また、シーボルト中将が本を書いたのはそのとおりですが、艦隊長官はこの年の二月以来キンメル大将でした。

なお、講演では「記録はこのへんで難しくなるのですが、ついに陛下のご裁可を得ず、真珠湾の攻撃をやったのが真相のようでした」(三十五頁下)とありますが、明らかにこれは間違いです。もちろん対米戦争の御裁可は出ていますし、開戦の八日の曜日について陛下が永野軍令部総長に質問をなされたという記録もあります。

(三)終戦時の対ソ交渉(三十六頁上下、三十七頁上)

講演では、「六月十八日の敗戦色が明らかになった日

本の国は、当時不可侵条約一年間有効期間中のソ連に、近衛さんが中心にすぎりました」とし、また「六月二十七日正式に文書を出しました。スターリンはモロトフを連れてロンドンへ飛びました」とあり、インドのパールは申しました、日本が降伏したのは六月二十七日、手渡したのは二十八日……」ともあります。

しかし、この「六月十八日、二十七日、二十八日」の意味が分かりません。この時機日本がソ連を仲介に終戦交渉を企図したのは事実ですが、「近衛さん中心」ではなく政府主体でした。

二十年六月二十二日の御前会議でソ連を介しての終戦工作が承認され、六月二十四日以降先ず広田重臣により駐日ソ連大使への打診が始まりました。特使として近衛さんの派遣が決まったのが七月十二日、その旨訓電を受けたモスコの佐藤大使がモロトフ外相に会見を申し入れたのが七月十四日ですが、当日はモロトフが所用という名目で会えずロゾフスキー次官に対し伝言を依頼するに止まりました。スターリンのロンドン行きは誤りで、行先はボツダムです。結局、最後までソ連はまともな回答をせず、八月八日二一〇〇に至って漸くモロトフが佐藤大使に回答しましたが、その内容は「明九日から戦争状態に入る」というものでした。しかも、そのことを東京に報告する佐藤大使の

電報は妨げられて届かず、また駐日ソ連大使も何も云わず、日本政府がソ連の宣戦を知ったのは九日〇四〇〇のモスコ放送によってであったというのが実情です。

第三、東京裁判に関すること（この項は主として「私の見た東京裁判」の著者富士信夫氏の資料による）

#### (一)真珠湾攻撃（三十頁上）

講演では「宣戦布告三十五分前に日本軍が無謀なる攻撃をしたと東京裁判は教えました……」とありますが、東京裁判で受理された証拠では、真珠湾攻撃開始は、ワシントン時間で十二月七日一三二〇、野村大使の対米覚書のハル長官への手交が一四二〇とその差一時間となつています。

#### (二)インドのパル判事の言動（編注、省略）

(三)原爆責任に対するウエップ裁判長の回答（三十七頁下）

講演では、東京裁判の記録の中に明確にあるとして「日本人は人間にあらず、原子爆弾の威力が如何なるものであるかということ、動物実験に使ったのがなぜ悪い」と述べたとありますが、東京裁判関係の記録の中には、そのような発言は見当たりません。

#### (四)キーナン検事と東條証人との応酬（三十九頁上下）

講演では、「東京裁判の記録に、キーナン検事は毒々

しげに、東條に起立を求め、あなたは侵略戦争をやった張本人として、あなたの良心・真心は痛まないのか……彼はいつもの通り腰にソツと手をあてて、『自分の行いました行為は、天皇陛下並びに、日本の国民に対しては、一言の申し開きの出来る行為ではありません。まさに万死に値する行為でありましょう。しかしながら追い詰められた弱小国が、自らの正義を守るために、立ちあがった正当防衛であるという気持に於ては、今尚変わりありません』、ここに東京裁判劇場最大の山場といわれる、キーン東條の一騎打ちがそこに行われました。……論告したキーンが、東條から論破され書類をもって退廷したことは事実でした。論争は明らかに東條の勝ちでした」とあります。

これは、東條証人に対するキーン検察官の反対尋問の最後の場面描写と思われませんが、「東條に起立を求め」ということは考えられません。審理中の法廷で、宣誓を終えて着席している証人に、検察官が起立を求めるといいうようなことは許されていないからです。

実際の応酬は、

キーン、あなたは日本の首相としていかなる行為をなしたにせよ、そのすべてのあなたのなした行為において……これをなすにあたって何ら法律的にも道徳的にも間違ったことをした覚えはない、こういうのがあなたの立

場ですか。

東條、間違ったことはないと考えます。正しいことを実行したと思います。

キーン、それでは、もし本審理においてあなたが無罪放免となった場合には、再びあなたの同僚と共に連れだつて、そうして同じようなことを平気で繰り返す用意があるというのですネ。

弁護人、ただいまの質問に対して異義を申し立てます。裁判長、異議を容認します。

キーン、裁判所の決定に鑑み、これで検察官側の反対尋問を終わります。

というもので、この後キーン検察官は発言台上の書類を持って検察官側の席に戻っており、「退廷」はしていません。

### 三、三上昭夫氏講演要旨につき

先帝陛下に対する誤謬を正す

鈴木正男

貴誌『郷友』を毎号寄贈していただき愛読してゐる一読者として申し上げます。

一月号所載の三上昭夫氏の講演要旨「大東亞戦争は日本が仕掛けた侵略戦争か」の一文はまことに胸のすく論旨

で、多年「大東亜戦争」は自衛戦争であり、大東亜解放の戦争であった。断じて侵略戦争ではないと声をからして主張し続け、「東京裁判史観」打倒に日夜懸命してゐる私どもにとつては、我が意を得たりとまことに有難く、力強く感じた次第であります。

但し、戦友会での講演のためか、所々に勇み足や誤謬があり、特に最後の結びの、終戦後の先帝陛下の御行動、及び貞明皇后の御行動については事実と大いに反する箇所があるのはまことに遺憾に存じました。尚、他の箇所にもいろいろ勇み足があるやに思ひますが、それは戦史の専門家も居られることで、それには触れず、本稿では陛下に関するこのみについて申し上げます。

一、三上氏は「いずれ（四十二頁下段）にしても陛下は殺される運命にありました」と断定して居るが、これは誤りである。終戦直後のアメリカ国内での世論調査では一部に死刑にせよと云ふ極論があつたが、間もなく鎮静した。占領軍は一度もそのやうなことを考へたことはない。マツカーサーは御退位をさへ懸命に阻止したのである。

二、「陛下割腹自刃の計画は三度貞明様は陛下から目を離さんように（四十三頁上段）」とあるが、かような事実は全くない。三上氏は何を根拠にかゝる妄説を立てるのであらうか問ひたい。

三、陛下とマツカーサーとの会見の記述中、九月二十一日とあるは九月二十七日、通訳武藤とあるは奥村勝蔵の誤りである。

四、同記述中、①マツカーサーが天皇を逮捕するため二ヶ師団の兵力を待機させた。②陛下を迎へてマツカーサーは傲慢にもマドロスパイプを口にくわへたまま立上らうともしなかつた。③陛下はマツカーサーの前で涙をポロポロと流し、命をかけて閣下のお袖にすがつてお願ひすると申された。④マツカーサーは米大統領に食糧を放出させるため日本の人口を八千万人に水増しした。これがバレたのが最高司令官解任の最大の理由であつた。

これらは全部虚構である。①、②、③については通訳の奥村勝蔵氏、侍従長藤田尚徳氏、当日の行幸主務官寛素彦氏等の手記、記録、及びマツカーサーの回顧録等によつて虚構であることは余りにも明白である。④に到つては今更ここで論ずる迄もない噴飯に類する言である。

五、「母君の貞明様は、亡くなるまで防空壕の中で生涯を送られた」（四十四頁）とあるが、これも誤りである。貞明皇后の御住ひの大宮御所は二十年五月二十五日の空襲で焼失し、八月十九日迄は確かに防空壕で三ヶ月生活されたが、翌二十日、軽井沢へ御移りになり、年末の十二月五日に御帰京、次いで十二月十七日沼津御用邸に御移りにな

り、一ヶ年御滞在になった。この間に、高松宮御殿の一部を大宮御所に移築、二十一年十二月十九日御帰京、それより崩御に到るまでこの御殿にお住いになった。

六、「貞明様は法華經の信者でしたから……法華經をあげ生涯を送られた」（四十四頁）とあるが、貞明皇后は神道に実に御熱心で、皇太子妃殿下の時代は法華經を御勉強になつたこともあるが、皇后になられてからは東京帝国大学教授寛克彦博士の「神ながらの道」の御進講を聞きたい御希望が大正三、四年の頃からあり、このことが大正十三年に到つてやうやく実現し、前後八回御進講を受けられた。

この大正十三年の新年歌御会始の御歌に

あら玉の年のはじめにちかふかな神ながらなる道をふま

むと

とある。この寛博士の御進講の速記は、更に博士に追補せしめ、思召により『神ながらの道』と題して出版せしめられた。この最後の校正は皇后陛下おん自ら当られ、その巻頭には御直筆の前記御歌を載せられた。そしてこれを伊勢神宮以下の全国官国幣社、各皇族、重臣要路、各図書館に下賜され、普及版は岩波書店が領布に當つた。このやうに貞明さまは敬神一途の御生涯であつた。先帝陛下が特に神事に御熱心なのは御本性であられるが、その上にこの母君の御信仰を享けられたものと恐察する次第である。

七、次にその貞明様が皇靈殿に陛下を招きになられ、皇靈殿は高いので東京市中が見える。そこから復員を待つ年寄の姿を陛下に御見せし、御腹をお召しになることや、御退位を御止め申上げた。陛下は母君の前で泣かれ、全国御巡幸を決意されたと三上氏は申して居るが、これは全くの作り話である。筆者は昭和二十二年より昨昭和六十三年迄、四十一年間、毎年皇居勤勞奉仕をして居り、皇靈殿の清掃も奉仕したこともあるが、宮中三殿は鬱蒼たる大木巨木に囲まれてゐて東京都内はおろか、皇居内も見渡せない。見渡せるのは御神城内のみである。

八、全国御巡幸は貞明皇后が御すすめして御決意されたのではない。御巡幸は当初から陛下御自身の固い御決意であつた。これは当時の宮内府次長加藤進氏（現東京都世田谷区住）、侍従次長木下道雄氏（故人）の記述、その他の記録により明白である。

九、御巡幸の「最初の地は広島でした」とあるが、最初の地は神奈川県で昭和二十一年二月十九日であつた。それより関東各地、東海、二十二年に入つてからは近畿、東北、甲信越、福井、富山、山陰と御巡幸になり、広島市へ入られたのは山陰路より山口県を経て二十二年も年の瀬に近い十二月七日のことであつた。『広島では共產党の腕ききが、今こそ戦争の元凶である裕仁に対して、恨みを報じよう云

々」とあるが、かかる事実は全くなく、市民奉迎場には七万人の市民が集り、バンドの吹奏のもとに君が代を大合唱、天皇陛下万歳を絶唱した。陛下はマイクに向はれ朗々たる御声で「広島市は特別な災害を受けて誠に気の毒に思う」といふ主旨の御言葉が特別にあった。思ひもかけぬ御言葉に会場は万歳の嵐に再びつつまれたのだった。

十、次に「北陸のある所に於ては、朕はタラフク飯を食う、汝臣民飢えて死ね」のプラカードを仕立て、共産党が二千名のデモ行進をやった」とあり、それに対して「陛下は（その）前に頭を下げられました。皆様方が私を打撃することによって心がいえるならばごずいにめされたい」とあるが、（四十四頁下段）これも全然の虚構である。何も知らない読者はそんなことが、あったのかと思ふかも知れぬが、全然、根も葉もない虚構である。三上氏は虚構でないと言ふなら北陸のどこであったか明示されたい。

十一、「陛下に向つての発砲もありました。ある八二歳の老婆が犠牲になつたことも、ある中国地方の一角でありました」（四十五頁上段）の記述に到つては私は怒りさへ覚える。私は、私どもの雑誌にこの戦後の天皇陛下全国御巡幸のことを昭和六十年一月号から前後二十回にわたつて連載した。そのためには当時の地方新聞はもとより、宮内庁図書館、国会図書館の資料も全部当り、また当時の行幸に

扈從した宮内官にも面接し、お話を御聞きしたが、かかる大逆など全くなかつた。三上氏はそれは一体、中国地方のどこであったか明示されたい。

十二、但し、御巡幸に警備のために同行したMPの天皇を守らんがための緊急の止むを得ない空に向けての発砲はあつた。それは昭和二十二年六月五日、大阪府庁に御立寄りなつた時のことである。陛下が府庁の手前百米のところまで御車を降りられ、御ひろひで進まれたところ、天皇陛下万歳の歓声とともに大群衆があつと云ふ間に陛下の身辺に押し寄せ、身動きも出来ぬ大混乱となつた。帽子は飛び、靴は脱げ、子供は泣き叫ぶ。警察部長が「静まれ、陛下が危い」と絶叫しても効果はない。ここで警備に同行してゐたMPが空に向けて拳銃の威嚇射撃の非常手段をとり、群衆がやや怯んだ一瞬に側近は陛下を御引きずり申し上げるやうにして、やうやくにして群衆の重圍を脱したのであつた。

このやうなことは同年八月五日、福島県常磐炭鉱御視察の時にも起きた。陛下はこの時地下四百五十米、炎熱四十度の坑内にまで入られ、坑夫たちを激励されたのであつたが、坑の中から外へ出られ、オープンカーで平駅へ向はれ、下車されたとたん前前の大阪の如き大群衆が押し寄せた。ここでもMPが威嚇射撃をしてやつと大群衆から陛下

を御守りしたのであった。

十三、三上氏は共産党員が各所で集団で陛下を誹謗したやうに述べてゐるが、これも全くの虚構である。ここで申したいのは、事實はこれと全く反対であつたと云ふことである。その一例を示す。それは愛知県御巡幸中の昭和二十一年十月二十一日、名古屋市の愛知県庁前の出来事であつた。

ここでも陛下は大群衆の万歳の嵐にとり囲まれ、MPは威嚇射撃までしなかつたが、その寸前と云ふところであつた。陛下がやつとのことで県庁へ入られてからである。一人の男が「天皇は万世一系でない」と演説を始めた男があつた。大群衆は、忽ち激昂して、この男に襲ひかかつた。この男は血まみれになつて県庁の中へ逃げ込んだ。群衆は

「殺せ、殺せ」と絶叫しながら県庁の中へなだれ込んだ。その男は危い所で県警察の手で保安課の部屋へ入れられ保護された。警察官が必死になつて「陛下の御近くで騒ぎを起しては申訳ないではないか」と群衆をなだめた。人々は

そこで一斉に天皇陛下万歳を連呼して表へ出た。この男は共産党員であつたか、どうかはさだかでないが、危く県庁へ逃げ込んだので生命が助かつたが、さもないが、殺されてゐたと思はれる。

うっかり天皇を誹謗しようものなら大群衆に叩き殺される。御巡幸のゆく先々はすべてこのやうな熱氣と氣迫が漲

つてゐた。共産党も全く手も足も出なかつたのである。これが実状であつた。

以上、後世のため、いささか三上氏の誤謬を正した次第であるが、頁数の関係で充分とは云へない。行間の意をご賢察賜れば幸甚である。  
(平成元年二月一日)

(仮名遣い原文のまま)

#### 四、パール判事に関する記事の誤り

田 中 正 明

「郷友」一月号三十八頁から三十九頁にかけてのインドルラダビノード・パール博士に関する講演要旨の内容は全部虚構です。

博士が広島原爆慰霊碑に参拝したのは昭和二十七年十一月二日で、同行者は下中弥三郎、中谷武世両先生のほか通訳のナイル氏、秘書のセン氏と小生です。この時以外に博士は広島を訪ねていません。講演要旨に「私(三上)は縁あって、このパール判事のお伴をして広島へ参りました」(二十八頁下)とあるのは間違ひです。殊に、「彼(博士)は中へ飛び込んで、あの原爆碑を足蹴にしました」とある部分は、博士の名誉のため是非訂正願わなくてはなりません

ん。博士は断じてそのような無礼、無作法をされる方ではありません。このことは、まだ存命中の中谷先生、ナイル氏に、要すれば、はっきり証言して頂くことができます。

因みにこのときの実情は次のとおりです。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんが、元の原爆慰霊碑の碑文を二回にわたって通訳させた博士の顔は急に厳しくなり「ここに眠っている犠牲者はすべて日本国民であり、原子爆弾を投下したのは日本ではなくアメリカである。その原子爆弾に斃れた人々の御霊に、投下した国の大統領なり国民が謝まるのならわかるが、なぜ日本人が「過ちは繰り返しませんが」と謝まらなければならぬのか。いったいこの碑文は、誰れが誰れに、何のために何を謝まろうとしているのか、私にはわからない。仮にもし、日本が悪かったためこのような凶悪な爆弾を投下されたのだという自虐的な気持ちからこのような碑文を書いたとするなら、それはとんでもない間違いであり、歴史的事実にも全く反するものである」と話されました。

随行していた新聞記者が、この博士の言葉を大々的に報道してセンセーションを巻き起こし、時の浜井広島市長と博士が対談することになり、私も傍聴しました。市長は、「過ちを繰り返しませぬから」は日本人ではなく人類の言葉である」と言い逃れましたが、これを聞いた博士は、東

京裁判によって烙印された「日本悪玉論」がこれほどまでに日本人の魂を奪ってしまったのかと行って大いに嘆かれました。そして、日本がこの焦土の中から立ち直るためには「先ず何よりも、このような自虐的な卑屈意識から脱却することだ。日本がアジアの先進国であり、アジア解放の先達であることは間違いない。どうかその誇りを一日も早く取り戻して頂きたい。日本のよき伝統と東洋の精神文化の発揚のために貢献して頂きたい」と切々と語られ、このことも新聞に報道されました。

また、講演要旨では、博士が病気の夫人を見舞うため帰国したとき、「一晩も看病することなく、再び東京へ戻りました。言うまでもなく妻はその夜死にしました」(三十八頁上下)と述べていますが、事実と違います。

「裁判もいよいよ結審に近づいた昭和二十三年八月、博士は夫人危篤の急電を受けて急遽インドに帰ったが、『あなたのお帰りは嬉しうございますが、あなたがこの大切な使命を果たされるまでは、私は決して死にません。どうぞご安心下さって、すぐ日本にお帰り下さい』との夫人の一言に感激して、そのまま東京へ引き返した。夫人は約束どおり、氣息えんえんながらも、裁判が終わるまで生きのびていたが、大任を果たして帰った博士に手をとられて、いくばくもなく瞑目された」というのが真相であります。



# 政治家へ——国家安全保障に

## 関する提言(一)

杉田 一 次

(連盟名誉顧問  
日本世界戦略  
フォーラム会長)

(この数年間——二十一世紀に向かう)

### 国家盛衰の分岐点

英国の首相、外相を歴任したロード・ダグラス・ヒュームは「孫への手紙」の中で「一九二四年頃から通称十年間の『戦争防止原則』という奇妙な政策基準があったが、英国の上下が国際連盟思想の虜になっていて、再軍備の方向に沿った措置など何一つ採られなかった。チャーチルさえ第二次大戦の七年前、われらの生存中に戦争が再発することを余は信じないとニューヨークで記者会見で述べていた。

英国が一九三五年か遅くとも一九三六年に真剣に再軍備に着手してさえいたら事態は遥かに好転していただろうに」と書き送っている。さて二十一世紀に向かわんとしつつある日本の今日はどうであろうか？

第二次大戦で日独両国は共に敗れ、戦後連合軍の占領下に置かれ、敗北の悲惨さを骨の髄まで味わされた。曾って歴史にも前例のない国際戦争裁判を受け、また軍を完全に撤廃させられ、国家の独立性を失ったうえ、多くの改革が各方面に互って推進せられた。精神的にも物質的にも大き

なインパクトを受けた国民大衆はかつての国家及び社会指導者達を責め、反戦反軍の感情は国内に蔓延した。今もそれが至るところに巢食っている。このことは連合国(軍)が当初大いに期待していたことで、それが今実を結んでいると言えよう。

然るところ、予期しない朝鮮戦争が昭和二十五年六月勃発し、連合国(軍)の政策は大変更を余儀なくされ、日独は救われることになった。両国再建の道は決して容易でなかったが、幾多の変遷を経つつ戦後四十余年にして両国とも今日の繁栄を手中に収めることができた。

然しここで見逃してはならないのは日独の間には根本的な異なる問題点を残していることである。それは何か？

要約して言えば西独は当初から自主的に再軍備を期して独立国家を目指すことに積極的かつ執念的であったのに反し、わが国は占領軍の指令に従順で、軍ならぬ警察予備隊を創設したままの姿勢で爾来今日まで国家の独立を第二義

的にして軍の再建を怠ってきたことである。換言するとわが国にあっては国家指導者達は国防（軍事）に関する基本的な理解認識がなく、独立国家の再建よりも経済復興に努力を傾注した。ために上下を通じ物質至上、個人中心へと趨り、諸外国とは本質的に異なる「軍なき国家」——半独立国家（商人国家）の道を辿ることになった。後々までも大きな禍根を残しているが、それが今日政治家初め名界各層に於いても明らかに認識されていない。もし現状のまま太平洋時代に向かうものとすれば、日本の将来は危ないと言つて過言ではあるまい。

本論に於いてはそれらを解明しつつ、わが国の採るべき方策について若干の所見を述べ、ご叱正を頂くことにしたい。

### 一、戦後の情性に押し流されてきた日本

戦後わが国に於いては各国に見られない特異現象が起きているが、上下ともにそれをよく認識していない。曾って「己を知らず」して日本は大東亜戦争に趨つたが、同じように現況は日本の立っている立場を忘れていっているというより自惚れさえ見える。

その第一は敗戦直後に於いて連合国（軍）の採つた諸政策が、わが国民大衆の国家観念や軍に対する観念を著しく

歪曲せしめた。特に軍は残虐なものとの印象を強く植え付け、国民大衆をして軍事に無関心ならしめた。

確かに悲惨な敗戦それ自体が日本に大きな変化をもたらした。第一線で戦つた将兵は一般国民以上に戦争の悲惨さや残虐さを目撃し、体験もしてきた。このような雰囲気下にある日本に対し、占領軍は軍の廃止、教育制度の变革、極東国際軍事裁判の実施、神道及び国旗掲揚の禁止、教育勅語の廃止、特高及び官民の戦争協力者（二十一万）の追放、占領憲法の押し付け等、矢継ぎ早に諸政策を進め、戦争遂行に努力した者を排除し、反軍反戦思想を強く国民に植え付けた。軍（人）は殊更残虐であるとの印象を深からしめた。それは当初から独立国家として日本の存在を認めないことを前提としていたからであつた。大東亜戦争で日本の将兵が優勢な敵軍に対し善戦敢闘したことはマウントバツテン、マックアーサー、ニミッツの各元帥及びスミス大将（ビルマ作戦の英軍司令官）等の賞賛しているところであるが、それが米英等の予想を超えたものであつたがため、彼等の報復を一層強からしめる結果となつた。誠に皮肉なことと言わなければならぬ。

極東国際軍事裁判はそのよい見せしめであつた。A級戦犯の極刑も旧陸軍に向けられた（七名死刑、中六名陸軍）。B・C級戦犯裁判も次の如く行われ、その大部は陸軍將兵

であった。

人員（重複するものもある） 死刑

連 合 国 二 〇

米 国 一、三六四 一四〇

英 国 八九五 二二三

オーストラリア 九一三 一四〇

オランダ 一、〇二四 二二五

中 国 八五四 一四九

フ ラ ン ス 二二九 二六

フ イ リ ピ ン 一四二 一七

計 五、四二四 九二〇

国家に忠誠を尽し、生命を賭した軍人は恩給を停止され、戦後の物資、特に食料不足の中にあつた軍人（本人達は異境の地にあつた）家族の困難は非常なものであつた。

将兵の遺家族に対する国家補償も日露戦争まで遡って禁止された。特に哀れであつたのは不具になつた多くの戦傷者が市中（電車内）で物乞をする状況が数年続けられたことである。戦争を推進した閣僚（軍人を除く）、シビリアンの官公吏には恩給の停止はなかつた。ここに正邪は逆転し、正義は邪悪となり、不義不正は正義に変わり、民衆の

心理に大きな影響を与えた。国家や軍（特に陸軍）に対するイメージは極端に歪曲されてわが国の歴史、伝統や美風は破壊されるようになった。それらは今も続けられていて、一般もまた今日の経済繁栄に陶醉している。提灯持ちをしてゐる大新聞さえある。

その第二は占領憲法の下に上下を挙げて経済至上主義・物質主義へと走り、「長いものには巻かれる」の思想がはびこり、自己中心となり、独立自主の精神や責任観念が喪失せしめられ、責任回避が横行している。

明治維新以来、アジアに於ける唯一の先進国家として独立自主精神が鼓吹され発展してきたわが国であつたが、占領下に於いては「地頭と泣く子に勝てぬ」との風習が幅をきかすことになつた。日本が米国より属国視されようが自衛隊が傭兵視されようが頓着することなく、政府も国民も経済復興第一に徹した。外国からエコノミカルアニマルとか日本株式会社と評されようが、意に介しなかつた。政治家、特に野党には党あつて国家なしの観を呈し、そのうえ国会では日米安保条約と自衛隊によつてわが国防が達成されてゐるが如く論ぜられて、国民は国防義務より除外され、国民大衆の防衛や軍事に関する関心を薄からしめ、国家秘密保護法さえいまだに制定されていない。

その第三は表面を糊塗する傾向が強くなり、内容よりも

形式が重視されることになっている。

戦後、国家のバックボーンたるべき軍はごまかされて軍ならぬ自衛隊なるものが作られ、恰かも軍隊であるかの如く取り扱われ、「ゴマカシ」が政治の中心部から行われた。政府及び政治家は「政治の基本は国の安全にある」と強調しながらその中心となるべきものをごまかしてきたとあっては万事これに従い、法規の字句や形式が尊重され、内容は軽視されるのは当然であろう。総司令官たる総理大臣がロッキード事件で道義的責任さえ採らなかったことが、自衛隊将兵にどのような精神的な影響を与えたかは論議の対象にもならなかった。年々道義が低下するのも自然の成り行きである。リクルート問題もその延長線上にある。

軍人としての経験のない自衛隊員は現況で満足して、これが新しい日本の軍人であるかの如く誤認し、旧軍の伝統や美風を受け継がんとする積極性はなく、形式を尊重するようになっている。

(注) 防衛(保安) 大学設立当初、「新しい幹部を育成するのだ」と言い旧軍が総て悪いという雰囲気があった。未だに防大校長にシビリアンを充当しているが、世界中に例を見ないところである。自衛官を何時までも「箱入り娘にしておく」取り扱いは戦前の古い思想と異なるところがない。

その第四は占領軍の日本弱体化政策に便乗した外国革命勢力や国内左翼分子(日教組を含む)による日本破壊工作(間接侵略)が進められてきたことである。

占領軍の対日政策や宣伝に惑わされ、戦前のわが国はヒトラーやムッソリーニの下にあった独伊の独裁国家と同様であったかのようにミスリードされたところが少なくない。その上、戦後逸早く共産党を自由化(獄中のものも釈放)したこともあって外国勢力と結託することが奨揚せられた。殊に軍の廃止のみならず、精神的にも武装解除せられた大衆は間接侵略に関心を払わなくなってきた。三宅島の飛行場建設、成田空港拡張反対、百里基地使用反対、逗子の米軍将兵住宅問題なども無知に乗ぜられた左翼勢力の影響が少なくないように思われる。

(注) 逗子市長が女性町民を引率してワシントン乗り込みデモを行うたことなどは狂気の沙汰であり、ミッドウェイ空母や潜水艦入港反対デモの如きも同盟国民のなすべきことではない。これらは国防を忘れている証左で、日米の立場を逆に考えればどのような結果を招くかは理解されよう。

思うに国家社会のため殉じた人々の犠牲の下に今日の存在や繁栄のあることを忘れ、これらの人々に感謝や敬意も払わず、国旗、国歌をさえ蔑ろにし、栄華三昧の日々を過

ごしている国家や国民に天罰もなく今後も生存し続けられるのであろうか？ 大東亜戦争での最大欠陥は国家の中枢指導部にあった。今日もその改善が行われず、剩え軍でもない自衛隊の現況に甘んじているのであるが、このような状態では有事、国の安全は期し得られるのであろうか？ 今後も占領憲法が国の安全を保証してくれるとも思っていないのであろうか？

## 二、独立国家に不可欠な軍と国防基盤の存在

憲法改正もさることながら独立国家のあり方を考える必要がなからうか？

凡そ軍は国家（国体）を守護するため設けられるもので、軍（人）は生命を賭して国家や国体の防衛に当たることを使命としている。また軍の強弱は国家の盛衰を意味する。これらの事は古今東西各国に共通した鉄則である。第二次大戦後も変わっていない。この国際的常識が四十余年を経過したわが国では問題にもなっていない。

戦後独立した国家はその数、百有餘に達しているが、独裁制（共産制）であろうと或は民主制であろうと、何れも国家も主権の確立を重視し、国には元首があり、軍が存在し、独立国家の面目を内外に明らかにしている。戦後、米ソ両大国がその勢を欲しいままにしてきたことや、敗戦直

後、軍廃止を余儀なくされた日本・西独の姿を見れば軍存在の意義を説明する必要はなからう。

実に軍は国家のバックボーンであり、人間の背骨に相当するものである。背骨の病める人間は脊髄カリエスにかかった不具者である。軍によるクーデターなどの起こる国家はバックボーンが病んでいることを示し、軍のない国家は楽器なくして歌を歌い、それが音楽と心得ているのと異なるところがない。

第一次、第二次大戦で戦争の規模が益々拡大されるに伴って、各国は徴兵制や国民皆兵制を採用することが多くなり、防衛に関する国民の義務が重視されることになった。軍人は善良な市民であり、市民は立派な兵士たるの資格を具備することが要請され、軍の使命には変化はない。共産国家は押しなべて徴兵制度を採用し、小国であるスイス・スウェーデン及び戦後独立したイスラエル・シンガポールの何れも国民皆兵である。イスラエルの如きは女子にも兵役義務を課し、有事、軍は国家興亡に全責任を負う態勢を整えている。各国とも兵役に服することは国民の国家的義務であるとし、憲法に明確に規定されているばかりでなく、それが名誉であるとさえ考えられている。このことは世界各国に共通しているところであるが、日本が諸外国と異なった態勢にあることは申すまでもない。

(注) わが国では徴兵制は共產主義国位と考えられている

が、南米の大部分の国も徴兵制を採用している。日本  
のような国は珍しいことを認識する必要がある。

戦後国家に於ける軍の占める地位はいよいよ重きを加  
え、その組織や構成は核、ミサイル等新兵器の出現に伴っ  
て極めて複雑多岐となり、その運用指揮もまた往時と比較  
して雲泥の差が見られるようになってきているが、わが国  
では軍を異端視し続け、軍保持の意向さえ見られない現状  
である。第二次大戦前の英国同様、平和思想や国際連合思  
想の虜になっている。

ここで東南アジアを含む西太平洋地域に於いて独立した  
左記諸国が国防省（ブルネイ、フィジーを除く）や軍を保  
有していることを指摘して置きたい。

韓国

中華民国

ベトナム

フィリピン

マレーシア

シンガポール

ブルネイ

ビルマ

インドネシア

フィジー

韓国は独立当初は日本と同じく米国の指令により警察予  
備隊的なコンスタビュラリーを創設したが、当初より独立  
国家に不可欠の軍創設に努力を傾注した。この点、日本と  
著しく異なるところである。

殊に朝鮮戦争起は比較的国軍建設を容易ならしめる  
とともに、国家安全保障（国防）の基礎固めが行われるこ  
とになった。

中華民国（台湾）は大陸より転移した国府軍（野戦軍）  
が、わが国より八十名の軍事顧問団を十年近く極秘裡に招  
聘して、旧日本軍の予備役制度、動員、召集等国防に必要  
な制度法規を採り容れ、国軍を刷新して今日に至っている  
が、わが国の体制は韓国や中華民国より著しく劣っている  
ことは申すまでもない。

一九六五年独立したシンガポールはイスラエル、スイス  
の例に倣って国民皆兵制度を採り、十六歳の男子（高校卒  
業）を二ケ年の兵役に服せしめている。何れもこれら諸国  
がNIEESとして経済発達を来している国々で、その後  
には確固たる国家安全保障態勢が整備確立していることを  
見逃してはならぬ。

南太平洋に存在するフィジー（人口七十三万）でさえ、  
大統領の下に三千五百名の陸海軍（予備五千名）を擁し、

左記の如く部隊（人員）を国連軍に派遣、協力している。アフガンの国連監視団に一名（シビリアン）しか派遣していないわが国とはよい対称をなしている。

レバノン 七〇〇名

シナイ半島 四〇〇名

アフガン 四名

このように戦後独立した国々を一瞥しただけでも明らかのように、各国は自国の軍を整えている。軍は飽くまでも国家の主人公的存在となるべきでないが、軍は国家の全機能を調和し、国家の利害関係に従属し、国家の第一の従僕となっている。独立国家の態勢が軍の存在とともに整えられることによって国家の威厳と尊敬が増大されるものである。靖国神社や教科書等をめぐっての外国よりの内政干渉がましいことが頻発するのはわが国の奇形的国防態勢とは無関係ではない。軍のない国家は一人前の国家でないことを意味し、また国民大衆から蔑視されている武装集団（軍）しか持ち得ない国がどうして諸外国より尊敬や信頼を克ち得られるであろうか？ 久しく下積みになされ、大衆から白眼視されるような武装集団から潑刺とした積極精神が生まれてくるであろうか？ このような国家は結局外国からも軽蔑され、やがては孤立へと導かれることになるのがおちである。

各独立国がその存在と生存とに尽瘁する軍の忠誠を認め、軍に行動の自由を与えるときともに、将兵の生活を保証している所以もここにある。

軍人は素より報酬のため奉公するものではないが、国家の最も忠実にして優秀な従僕を米塩の憂あらしめ、また彼らとその家族の将来に対する不安を出来る限り取り除くようにしない国家は賢明であるとは言えない。

過去に於いて国家に殉じた将兵に対し尊敬と感謝の誠を捧げるように国家として各種方策を講じ、努力していることは万国共通である。それには例外はない。国家元首が外国を公式訪問する場合、必ずその国の儀杖隊を巡閲し、かつ無名戦士の墓地（例えば韓国にあっては国営墓地）を訪れ、敬意を表明することが国際的儀礼にさえなっている。敵味方であったことに関係なく、いずれも国家に殉じた人々の精神（愛国心）を崇敬してのことであって軍国主義や軍閥などとは何等関係のないことである。去る十一月十日、レーガン大統領はアーリントン墓地の無名戦士の霊に献花したのち、ポトマック川をはさんで立つベトナム戦没者の霊を慰め「他の人々が生きるために自分の生命を捨てることこそ最高の愛国心を表す行為だ」と演説した。国防基盤のない今日の日本と比較してどうだろう。（後述）

戦後四十余年経過し、経済大国にまで発展した今、独立

「国家の姿と軍存在の意義を反省すべきであるまいか？」

(注) 昭和四十三年十二月、岸元首相がロサンゼルス郊外に静養中のアイゼンハワー元大統領を訪ねたとき、占領憲法の話をした。そのときアイクは「世界情勢に合わないから一日も早く改正すべきだ」と述べたのは二十年前のことである。(『二十世紀のリーダーたち』より)

○ ○ ○ (つづく)

## 北方領土

原 田 雲 心

(東京都支部会員)

A 「又、北方領土の日が来たな。」

B 「うん、一般の外相会談もあまりパツとしなかったな。」

A 「北海道の北端から双眼鏡で覗いたり、国内の集会で抗議する位で相手がかえすと思うかね。」

B 「何かいい方法はないか。」

A 「うん、日本の総意を態度で示さなきゃ駄目だ。」

B 「二月七日の北方領土の日を悲願の休日としたらどうだ。」

ろう。

A 「うんそれはいい。日本全土に日の丸を上げるんだ。勿論外国居留民も全部だ。」

B 「意味のハッキリしない休日よりよっぽど有意義だ。」

A 「国旗に四島の名を書いた青色布片でもつけると一層効果的だ。」

B 「いくら相手が白ばくれても、こうすれば少しは気になるだろう。」

A 「それに、世界各国が関心を持つよ。」

B 「国民総意だから右も左もなく全部賛成の筈だ。」

A 「国民意識を高めるのに最良の方法だ。特に青少年に関心を持たせるに効果的だ。」

B 「政府が出来なきや民間団体から始めたらいい。」

A 「逆だな。アハ。面白い笑話の一つ紹介しよう。」

先生「二月七日はどんな日か知っているか。」

生徒「二月六日の次の日だよ。」

先生「!!」







## 中ソ接近の動きの 中のアジア・太平洋世界

齋藤

忠ちゆう

（国際政治・軍事評論家  
日本を守る会代表委員  
連盟顧問）

ソ連の明日を決定  
するものは？

ソ連共産党書記長ゴルバチョフの外交術策は、アメリカ合衆国および西ヨーロッパ諸国との関係に就いて言う限り、既に相当の成功を収め得たと言わなければならない。だが、アジア、太平洋地域の諸国との関係に就いて言う限り、今日まで、何ら言うべき成果は無かった。

書記長就任の後まもなく、ウラジオストク演説で、彼が何よりも強調したのは、ソヴィエト社会主義共和国連邦がアジアの国家であるという主張であった。

古いヨーロッパには、もはや、ソ連に新しい力を与えてくれる何物も無い。いま、この国の必死の窮状を救い得る者は、アジア、太平洋世界の他に無いと言うのである。

とりわけ、現在のソ連にとって何よりも必要なものは、日本および大韓民国の高度の技術と巨大な資本なのだ。

だが、その日本あるいは大韓民国への接近に、なによりも大きな妨げとなつて居るものは、中華人民共和国とのあいだに三十年に亘つて続いてきたきびしい対立であらねばならない。

その中共を再びソ連の陣営に取り入れ得るか否かが、ソ連の明日を決定する。

ソ連は、国の興廃を賭けたその工作に、既に、第一歩を踏み出しているのだ。

ソ連代表団が、いま、北京を訪れる頻度は、ほぼ三日に一回と言われている。

両国間の貿易の額も急速に増大した。いまでは、一九八一年における総額のほぼ十倍。中ソの交流は、俄かに活況を呈しつつあるのだ。

更に注目すべきは、両国の間に、新しい政治的關係が復活しつつある事実である。その成否は、あらゆる意味において、ソ連の命運を決定すると言わなければならない。

## 三十年ぶりの中・ソ

### 首脳会談

この新しい動きに乗って、ゴルバチョフ書記長がみずから公式に中華人民共和国を訪問するのは、五月十五日から十八日に至る四日間。

その折には、中華人民共和国における最高実力者とも言うべき中央軍事委員会主席鄧小平を始めとして、首相李鵬、中国共産党総書記趙紫陽らの諸首脳と会談を行なうことになっていゝる。

ソヴィエト社会主義共和国連邦と中華人民共和国。この二つの巨大な共産主義国家の首脳が親しく一堂に相会して会談を行なうことは、一九五九年初秋九月のニキタ・フルシチョフ及び毛沢東、両者の会談以来、実に、三十年ぶりのことである。

まして、問題は、この首脳会談の持つ歴史的意義であらねばならない。

ソ連国営通信タスは、これを「新たな形の中ソ関係の基礎を形成するもの」であると伝えている。

確かに、この両国のあいだには、毛沢東の時代以来、幾たびかの深刻な不信の経験が在る。何よりも、まず、眼前の中ソ国境に、つい最近までソ連が展開しつゝあつた巨大

な軍事力の存在は、それを証示するものであつたと言わなければならぬ。

### 国家興廢の命運に深く

#### 関連するアジア制握の成否

更に、また、中華人民共和国と国境を連ねるアフガニスタン共和国に最近まで侵略を続けつゝあつたソ連の悪虐の行為である。北京は、最近まで、ソ連軍全兵力の完全な撤退を要求してやまなかつた。その要求が実現されざる限り、中華人民共和国としては、ソ連を信じて行動を共にすることは所詮は不可能であつたと言わなければなるまい。

だが、経済的にも、軍事的にも、重大な危機を内包するソ連としては、アジアの制握が成るか成らぬかは、すでに国家の存亡にも関連を持つ重大な問題なのである。ゴルバチョフ政権は、いま、その成否にすべてを賭けつゝあるとも言えるであらう。

ソ連外相シエワルナゼも、すでに、このたびの書記長の北京訪問を、「中、ソ両共産党の關係を含む両国關係の完全な正常化を目ざすものである」と評価している。

一方、中華人民共和国の側でも、そのシエワルナゼを上海に迎えた鄧小平中央軍事委員会主席は、「両国は外相同士の相互訪問によって既に關係正常化の段階に入つて居

る。だが、正式の意味における関係正常化は、やはり、ゴルバチョフ書記長との会談を待って、初めて実現し得るものであらねばならない」と語って居るのだ。

### ソ連軍アフガニスタン撤退

#### との重大な関連

なによりも、ソ連軍のアフガニスタンよりの撤退が、中ソ接近の重大な機縁となったことは、明白であらねばならない。

地図で見れば一目瞭然であるように、アフガニスタンは、中華人民共和国が深い友好関係を持つ、パキスタン回教共和国と直接に国境を連ねて居るだけではない。中華人民共和国自身とも、ほんのひと跨ぎの距離に在るのだ。この侵略が続く限り、中共としてはソ連の善意を信ずることは絶対に不可能と言う他は無いのである。

まして、そのアフガニスタン民主共和国は、曾てはソ連とのあいだに善隣友好条約を締結して居た盟邦であり、また、ソ連の指導と援助によって共産主義革命を強行した同志的国家であったのだ。

多くの点において中華人民共和国に酷似した条件に在るこの友好国に、ソ国が残虐無法の侵略を続ける限り、中共としては、安心してソ連との信頼関係を回復することは不

可能であったと言わなければならぬ。

ゴルバチョフのアフガニスタン撤退の決意も、そのような配慮のもとにおいて為されたのだ。少なくとも、中ソ国交回復の深刻な願いが、その決断の背後に在ったと言わなければならぬ。

中華人民共和国の党および政府の首脳たちにしたところで、同じソヴェト連邦の支援に頼って、蒋介石の国民党政権を追放し、国を奪うことに成功し得た人々なのである。眼前に、このような兇悪無残の行動を見て、深刻な衝撃を受けずに済むはずがあるだろうか？

### いまソ連が突破を試み 得るただ一つの正面

そのような事態の中で、ホメイニのイラン革命以来、あらゆる術策を弄してソ連陣営への獲得に狂奔してきた中東の成り行きも、また、決してクレムリンを満足せしめ得るものではなかった。いまは、ソ連が突破を試み得る正面は、もはや、アジアの他には無い。

ゴルバチョフその人が、党書記長の地位に就いて以来、そのアジア正面突破のためにひたすら全力を傾注しつづけることも、その意味において、当然のことであらねばならないのだ。それが、ゴルバチョフ政権があらゆる夢を賭け

て追求しつつある「明日への活路」なのである。

事実、ゴルバチョフその人が常に口にするとところは、その「極東正面の突破」であり、「アジア、太平洋世界の制握」であったのだ。

書記長就任二年後の一九八六年七月二十八日、彼は、早くも、アジア・太平洋地域への進出の決意を明らかにすると共に、わが日本および大韓民国に向かつて、明らかに、関係調整の呼びかけを行なっている。

### 極東経済特区の

#### 誘惑

その一つに、たとえば、ソ連極東地域に新しく「経済特区」を設けるといふ呼びかけが在る。現在、中華人民共和国内に設けられている経済特区に酷似した「特別合併企業地域」をソ連極東地区に特設するというものであったのだ。

これを設置する地域としてソ連が指定しているのは、極東シベリアのナホトカ港を中心とする沿海地区である。

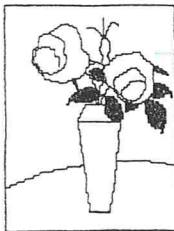
さらに、また、ウラジオストク海軍根拠地の北に、中ソ国境に沿って拡がるポクラニーチヌイ地区。及び、北朝鮮との国境に接するハサン地区。結局、シベリア地域共同開発の呼びかけなのである。

これが、わが日本および大韓民国に対する明らかかな呼び掛けであり、誘惑であることは、言うまでもあるまい。

だが、この工作の前面に横たわる多くの障害に就いても、モスクワは、充分の警戒を要求されつつある。ゴルバチョフの対アジア外交が今あきらかに当面しつつあるものは、共産主義世界内部よりの激しい反撃であり、批判なのである。

モスクワの大韓民国接近に激怒しつつある者は、なによりも、朝鮮人民共和国（北鮮）であり、また、太平洋の彼岸に在るキューバ共和国である。昨年のソウル・オリンピックにも、敢えて不参加を声明しただけではない。朝鮮人民共和国に至っては、何らかの破壊行為に出るのではないかとさえ憂えられたのだ。

キューバ共和国にしても、ソ連および東ヨーロッパ諸国の大韓民国接近にきびしい非難の眼を向けつつあった。ゴルバチョフ書記長は、すでに進退両難の窮地に追い込まれているのである。



## 軍事常識

### 空母物語 (一)

佐藤 文夫

(連盟理事)

米国防総省は年頭一月四日、米海軍の戦闘機が地中海の公海上で二機のリビア戦闘機を撃墜したと緊急発表し、両国間の緊張は一気に高まった。

同日正午頃、リビア沖公海上を航行中の米空母(航空母艦の略)「ジョン・F・ケネディ」を発艦し哨戒飛行中のF14トムキャット二機にリビア空軍のミグ23二機が高速で急接近して来た。再三の警告と回避運動にも拘らず敵対行動をやめないでミサイルにより撃墜したものと報ぜられた。

また昨年九月からのソウルオリンピックに際しては、北朝鮮側からの軍事行動が懸念されたが、米海軍は同期間中、空母「ミッドウエー」、「カール・ビンソン」を中核とする部隊を日本海に派遣して警備にあたり、その成功に多大の貢献をした。

いずれも米本土を遠く離れて前方展開中の空母による威力発揮の場面であった。

一方、日米安保体制下、わが国の有事に際しては、攻勢面を米国に依存し、自らは守勢面を担当するというのが防衛の基本方針である。外国の軍隊と協同して戦うという経験に乏しいわが国にとってこの「味方を知る」ことは緊要のことに属しよう。そして攻勢面の中心となるものは米国空母機動部隊である。

この意味において今回は米国空母の現状を概観し、各国空母についても紹介する。

#### 一、米国空母の変遷

第二次大戦が終った時、米海軍は約百隻の空母を保有していた。その内訳は「エセックス」級正規空母(二万七千トン)20隻、軽空母8隻で残りは商船改造又はこれに近い建造方法による護衛空母であった。しかし、これらの大部は一九五〇年代には退役し「エセックス」級の半数のみが残された。「ミッドウエー」級は「エセックス」級に続き戦時中に計画された大型空母で戦後に三隻が完成した。四万五千トンという当時世界最大の空母でパナマ運河を通過できない初めての米国軍艦となった。

戦後共産陣営との対立時代を迎えた米国では大洋を越えてユーラシア大陸奥地まで攻撃し得る戦略爆撃能力の保有

をめぐり海空両軍が激しく争った末、軍配は空軍に上がった。六万トンの大空母「ユナイテッド・ステーツ」は、このため起工後五日目にして廃棄の憂き目を見た。この調整に苦慮したフォレストアル初代国防長官はノイローゼになり辞任直後に自殺した。

その一年後に勃発した朝鮮戦争では極東にあった空母はただちに朝鮮半島沖に急行し陸戦や上陸作戦に協力した。この戦争に参加した米空母は14隻、英空母3隻、豪空母1隻であった。これにより空母の有効性は十分証明されたが、ジェット戦闘機の登場により大型化が要求されるに至った。加えて「エセックス」級は二次大戦中の酷使によって老朽化が早まり後継艦が必要となった。このため一旦廃棄された六万トン空母は再び目の目を見て一九五五年就役の一番艦には非命に斃れた「フォレストアル」の名が付けられた。本級は爾後毎年一隻のペースで四隻が完成した。続いてこの一部改造型の「キティ・ホーク」級(六万百トン)四隻も一九六一年から六八年にかけて就役した。これらがベトナム戦争において北爆に、ハイフォン港機雷封鎖作戦に縦横の活躍をしたのである。

なお、米海軍攻撃機のジェット化が完成したのは一九六八年ベトナム戦争の中期であった。この戦争に参加した米空母は15隻に及んでいる。

一九六一年には世界初の原子力空母「エンタープライズ」(七五、七〇〇トン)が完成した。原子力推進により航続距離が無限に近くなった同艦は、従来の自艦用燃料が不要となったため、航空燃料、航空兵器の搭載量が大幅に増加した。また、煙突が不要となったため高温の排煙が航空機の着艦を邪魔することもなくなった。しかし、四億五千万ドルに及ぶ建造費は航空装備に関してほぼ同じ能力の「キティ・ホーク」級の七割以上も高かったことから費用対効果が問題となり、激論の末この型の建造は一隻のみにとどまった。

史上最大の軍艦「ニミッツ」(八一・六〇〇トン)が完成したのは一九七五年であり、この第二世代の原子力空母の誕生まで実に十四年の歳月を要した。本艦が「エンタープライズ」と最も異なる点は八基の原子炉によっていたのと同じ出力を僅か二基で賄っていることで、核燃料寿命の大幅な延長(従来就役後三年であったものが十三年となる)とともに原子炉技術の進歩を示している。

米国は現在「ニミッツ」級空母四隻を保有し二隻を建造中である。かくて、一五隻空母体制をようやく整えることができた。なお、これらのほかに練習空母一隻と予備役空母二隻を保有している。

注、トン数は基準排水量を示す。

# 現代に見る間接侵略・革命(十二)

狩野 信行

(日本軍事史学会監事)

## (三) ポルトガル革命

ア サラザール、カエターノ時代

(ア) サラザール(つづぎ)

一九二八年四月二十七日、請われて蔵相となったサラザールは、増税とともに支出の節約をも行つて、同国の經常収支を均衡させ、四年目にして安定した黒字財政の国にしてつた。ポルトガルの通貨エスクドは、一九三一年以降、世界でももっとも安定した通貨となつたのである。この増税は、主として砂糖・ガソリン・石油製品・地租並びに官公吏・軍人の所得から行い、支出の節約は、行政整理・補助金の打切り特に海外植民地の費用削減によつて行つた。又例えば、国民や海外植民地の労働者が、南アの金鉱で働いた場合、ポルトガル政府が先ずその支払いを「金」で受け、次いで「紙幣」で労働者に支払うと言うような事も実施した。

一九三二年には、押されて首相となつたサラザールは、

これから一九七〇年の死迄の三十八年間、首相として国の舵取りを行つたのである。サラザールは賢明であつた。第二次大戦を含むところの激動の三十年代・四十年代は巧く乗り切つた。しかし、余りにも長期に亘る政権は腐敗するを免れない。六十年代に入る頃からは、海外植民地の反ポルトガル闘争燃焼とともに、国の経済・社会ともども混迷を深めて行つたのであつた。

## 一九三三年憲法と新国家

一九三二年、首相となつたサラザールは、かねてからの自己信条に従つて憲法を作つた。それが所謂「一九三三年憲法」である。これは彼の死の四年後の一九七四年迄続いた「珍しい長命憲法」として有名であり、ポルトガルの時代とこの国の特性を知る上でも重要なものである。以下、この憲法の特徴とそのポイントの部分について、ご説明しよう。

ポルトガルは共和国ではあるが、一つの協同体組合国家

であるとする。主権は勿論在民であり、国家元首たる共和国大統領と議会と政府が、その主権の行使を委ねられている。個人は、国民の一員として協同体組合に組織され、経済は、組合組織を通じて政治に組み込まれる。国は国民生活

を正しく指導する。つまりポルトガルは、規律と服従を重視する一種の全体主義（ファシスト）国家であった訳である。共和国大統領は、任期七年で直接国民によって選挙される。大統領は首相を決め、首相の押す閣僚を任命し、そして議会の召集と解散を行なう。首相は、国家元首の代理として国を統治し、法律と同じ効力の政令（議会の投票に左右されない）を発することが出来る。国民議会は、定員百三十で任期四年、直接・普通選挙で選出されるが、その他に組合議会なるものがある。これは、定員百三十五で、組合代表から選出し、任期は同じく四年である。ただし、この二種の議会は、いわば諮問機関であつて、委員会や部会の活動に意味があり、本会議は減多に開かれなかつた。海外領土は、本国と一体であるとされ、その中でポルトガル国民が原住民に対して果すべき道德的役割と言ふ垂直的關係を規定し、これが憲法に準ずる「植民地法」の柱となつていた。この規定によつて、対外的には、ポルトガルには植民地は「無い」こととなり、国際連盟や次いで樹立された国際連合からの植民地に関する問い合わせには、

「答えない」ことになつていた。大統領はロボットで、首相こそが真の実力者であり、事実サラザールは死ぬ迄首相であり続けたのであつた。

### ポルトガルとスペイン内戦

一九三六年二月、隣国スペインに人民戦線内閣が成立した。祖国を共產化から救えとして、スペイン軍部の反乱が始まり、同年六月から所謂スペイン内戦が続いた。ポルトガルは、スペイン軍部側つまりフランコ將軍側を支援し、義勇軍一万八千人がフランコ軍に参加した。彼らの内、実に八千人が死傷したと言われる。この間、フランコ軍を援助したナチス・ドイツの影響が、ポルトガルに深く浸透したが、サラザール自身は、ヒトラーを好んでいなかった。イタリアのムッソリーニについては、一九三六年迄は、自分の机の上にその写真を飾る程のシンパであつたが、イタリアのエチオピア攻撃が始まると、距離を置いて考えるようになった。又フランコに味方したので、ファシストとして特にソ連に憎まれたが、サラザールはやはり誰かの真似をしたのでなく、自らの責任において全体主義者であつたのである。

### 第二次大戦での中立

サラザールは、独裁者であつただけに、連合国・枢軸国双方からの猛烈な働き掛けを受けた。又ポルトガルの首都



リスボンが、国際的な謀略の舞台となったのは有名な話である。賢明なサラザールは、早くから連合国側の勝利するであろう事を読んでおり、中立を守り、かつ多少なりとも英米仏側に好意的な措置を取って行った。例えば、四三年（昭和十八年）夏には、大西洋上のアゾレス諸島の一部を、イギリスの基地として使用することを認めた。又国内に軍事上極めて重要な多くのタングステン鉱山を抱えていたが（イギリス系・フランス系・ドイツ系の経営）、四四年英国の要求もあって全鉱山を閉鎖した。この時は中立の立場を貫く為に、ドイツ系ばかりか英仏系の全鉱山を閉鎖した。もっとも英仏は差程困らなかつたが、ドイツは大きな痛手を受けた。なお、このことは同時に、ポルトガルの鉱山従業員約十万人の失業を意味していた。何れにしてもポルトガルは、第二次大戦中は、遂に中立を守り通し、かつ可成りの戦時利益を獲得した。

(イ) サラザール長期政権の継続

サラザールが蔵相になった頃から、彼の施策を支援し強化するスタッフが、次第に増えて行った。彼の出身で同国最古の名門大学たるコインブラ大学、そしてカトリック教会、ルシタニヤ地方の統合主義者、それに当時欧州に流行していたファッショ的乃至はナチス的な感動に突き動かされた有能な多くの青年達が、それぞれサラザールに接近

し、彼と一体化して行った。そして此の国家は、唯一つの公認政治団体である「国民同盟」(ウニアン・ナショナル)のもとに成長して行ったのであった。

### 第二次大戦の終結

しかし、第二次大戦が終ると、この勝利は反ファシスト・民主主義・社会主義のものであることとなり、サラザール達の嫌いなものばかりが、大手を振って歩くようになって行った。主な都市で、サラザールの業績や長期政権への疑問が投げ掛けられ始めたし、英米両国の如きは、このサラザールと隣国スペインのフランコ総統の引退を希望し、ひそかに圧力をかけてきた。一九四五年十一月、大戦終了後初の国会議員選挙が行われたが、英米等の圧力を考慮して、選挙期間中の検閲を中止するなどした為か、「民主統一運動」なる反国家的な人民戦線まがいの団体が出現した。サラザールは、大戦中に取り入れたナチス流の秘密警察を温存・改良して、この動きに対処する。その名を「政治警察」(PIDE)と言ひ、何度か変更したが、一九七四年の革命迄、この呼び名が一般的に使用された。四十五年十一月の選挙においては、「民主統一運動」は選挙をボイコットしたので、国会議員にさしたる変化はなかつたが、現実としては数百名の同運動員が捕えられ、軍人を含む公務員から免職者や、要監視の指定を受ける者が続出し

た。一九四九年以降も、四年毎の国会選挙、七年毎の大統領選挙ともに似たような事が繰り返されて行った。なお、これら選挙は、体制側の一種の安全弁となり、ポルトガルは一応ファシスト国家の印象を薄め乍ら、生存し続けて行くことができた。

#### カルモナ大統領と国連加盟

サラザールを産み、そして育てて行ったとも言えるカルモナ大統領は、三五年・四二年と三選され、戦後の四九年四たび立候補したが、この時だけは始めて対立候補が現れた。相手は、古手の將軍であつたが、彼は民主主義とサラザール批判をぶちまくつた末、選挙の公正が期待できないとして降りて了つた。この頃のカルモナ大統領は、サラザールを嫌い始めていたと言われるが、国民の直接選挙により、又々大統領となるや、サラザールを又々首相に指名し、二年後の五十一年に死んだ。後任者は、選挙によつてサラザール派のロペス將軍が選ばれた。既にこの頃では、所謂東西の冷戦が進行しつゝあつた事もあつて、ポルトガルは四十九年、「北大西洋条約機構」(NATO)に迎え入れられ、又五十五年にはソ連が拒否権を発動し続けていたところの国際連合にも加盟することができた。

#### サラザールの老化とサンタ・マリヤ号事件

このあたりからサラザールの老化現象が目立ち始め、実

際的な事項は、昔を知らない若手の「国民同盟」員であるテクノクラート達が、処理し始めるようになっていた。その代表とも言える者が、のちに首相となつたマルセロ・カエターノである。一九四〇年代のサラザールは、首相・蔵相・外相・国防相等を一人で兼ねていたが、さすがに六十歳を過ぎてからは首相だけになつていた。大統領に棚上げでもして貫えば楽であろうが、勿論そのような訳にはいかない。この頃の大統領は、サラザールを首相に任命する以外は、余り仕事がない状態であつたし、従つてカルモナもロペスも大統領職を内心嫌つていたとも言われている。一九五六年の大統領選挙の時、ロペス大統領は候補から外され、トマス提督が候補者となる。これに対し、空軍のウンベルト・デルガド將軍が反サラザールの統一候補となり、活発な運動を続けて国民の間に大きな人気を呼んだ。デルガド將軍の公称の得票は、トマス提督の四分の一であり、トマス氏が大統領となつたが、巷では本当はデルガドの勝ちだつたと言ひ噂さが立つた。

(つづく)



# 「サイレント・ミッション」(八)

訳者・柏木明

(連盟理事)

バアーン・A・ウォールターズ著

## 八、共産中国

### ○戦後の米中関係

一九四九年十月一日、毛沢東は天安門前広場で中国共産党による中華人民共和国の建国を宣言した。これは第二次世界大戦中の抗日統一戦線で挫折していた長い中国人民戦争の帰決であった。この内戦では米国は蒋介石総統とその国民党の軍隊を支援していた。

抗日戦争が終了した後は共産主義者達とは極く短い間僅かな接触があっただけで、中国共産党と米国との間には大きな沈黙が存在するだけであった。ワルシャワで会談しようとする動きはあったがそれも無に等しかった。

蒋介石が台湾に脱出してからも我々は台湾の国民党政府を支持し、アメリカ第七艦隊は共産党の台湾侵攻の防衛に当たっていた。この結果一九四五年以降米国は毛主席との外交関係を一切持っていないかった。

四分の一世紀は中国本土と米国との政府関係を緩和する動きは皆無のまま過ぎていった。朝鮮戦争では中国は我々に対して果敢な戦いぶりを示し、毛沢東の息子は北朝鮮の

志願兵として戦死した。中国共産党は中国が長い間国連から排除されてきたのは米国の所為であると信じており、事実我々は中国の国連加盟に事あるごとに反対してきた。二国間の睨み合いは中国共産党宣伝部により絶え間ない罵倒の連続であった。

中国とソ連との仲が決裂した後もこの状態に変化はなかった。ベトナム戦争では中国はソ連とともに北ベトナムの南への侵略を助けて食糧、資金、武器等の補給に力を貸した。中国の領空は北ベトナムの航空機を米国の攻撃から防る聖域となり、彼らは我が国の航空機を撃墜し「厳しい警告」を何百回も発した。国際問題のことごとく悉くが反対陣営の問題とあって良かった。公的な、また社会的な国際的集りの場では両国ともに用心深く互いに無視することに努めてきた。私自身フランス大使館付武官として、同じ中国共産党の大使館付武官とは極力接触を避けるようにしてきた。彼らは報復主義の立場を貫いてきた。かつてポーランドのレセプションの会場でソビエト武官が私に「貴国の背後には

北ベトナムが控えている」と言ったので、私は「貴国の背後にも中国が控えている。それも北ベトナムよりもずっと大きな」と言って相手をひるませたことがあった。ここでは地球上で最も人口の多い国と、地球上で最も富裕で権力のある国とが如何なることがあっても絶対に互いに接触しない状態が作り出されていた。事実第三国を仲介にしなれば何も交渉を持つとうとしなかったのである。

中国全体の問題は米国でも「誰かが中国を赤に売り渡したのだ」という流言が飛んでいた。アメリカの政策についても人類の四分の一を共産化したという責任を右派が左派を追求して論議が沸騰した。アメリカ人は中国に対して感情的に惹かれるものを持っていたが、今の状態ではアメリカの政府高官がいくら現状打破を主張してみてもその実現は難かしかった。

### ○ニクソンの対中接触

中国が米国との接触を望んでいる徴候は全くと言って良いい程無かった。ソ連とは決裂したにも拘らず合衆国に対する彼らの宣伝活動は以前にも増して熾烈を極めた。こうした行き詰りの中で大統領命令を出すことにはかなりの勇氣を必要とした。それをリチャート・ニクソンは実行し、ヘンリー・キッシンジャーが忍耐と絶えざる努力でその政策を実行したのである。二人が中国に惹かれたのは中国の肝

煎りで北ベトナムに侵略を思い止まらせることができるのではないかと考えたからである。この特別な時期はアメリカが国際的孤立主義をとっている以上、直ちにこれを実行に移す必要があった。以前開かれていたように中国に対して門戸は開かれ始めていた。どの程度開かれるかは中国が米国を強力な国として認める度合にかかってくる。もし反対に中国が我々を孤立主義に陥った武装アメリカという觀念で見ればアメリカに対する関心をなくすであろう。もし我々が南ベトナム、カンボジア、ラオスを放棄したように朝鮮や日本を放棄したならば、これを政策決定の根拠にする筈である。私の考えではもし我々が台湾を捨てたならば、共産主義中国は自分達に対する友好の行為とは認めずに、むしろ米国に対する不信の念を強めたであろう。この小さな地球上では対話こそ極めて重要である。我々の中にはこれに代る良策を持つ者は誰もいなかった。

### ○中国に対する任務

中国共産党に対する私の任務は、パリの大使館付武官をしていた頃、パリから帰国し、ニューヨーク市のピエールホテルに就任前のニクソン大統領を訪問した一九六九年一月から恐らく私も気付かない中に始まっていたといつてよいだろう。短時間の訪問であったが、この時彼は私に、自分の政権下でいろいろやりたいことがあるのだが、その中で

も共産中国に対する門戸開放を実現し彼らと接触したいことだと話した。地球上で最大の人口を持つ国と最も強力な国とが何の接触を持たないということはあらゆる点で世界の損失であると彼は思っていたのだ。

その時点ではこの考えが大変無理な企画だと私には思え、どうして実現するか予想もつかなかった。私は彼の指示でその直後、ニクソン氏が国家安全保障問題特別補佐官に任命したヘンリー・キッシンジャー博士に会いに行った。初めて会う彼はピエールホテルに別の一室をとっていた。私は博士の著作をずいぶん読んでいたが、彼の方もどこかでまた誰かから私のことを聞いていたに違いなかった。彼は私に三つの資料を作ってくれないかと言った。私はそれらを二三日で仕上げた。一つはブラジル、一つはNATO、そしてもう一つはベトナムに関するテーマであった。ピエールホテルで、何故ニクソン氏が私を選んだのかと逡巡しているキッシンジャーの不安そうな姿を私は見たが、そんな彼を二度と見ることはなかった。

それから一年過ぎて中国に対するこの考えは更に具体化してきた。パリの北ベトナムとの交渉からんで、パリから頻繁に米国に帰国していた私はある時キッシンジャー博士から中国に届ける一通の手紙を手渡された。その内容もしも中国人民共和国が秘密会談を望むならば米国はそれを

設定する用意があるというものであった。連絡は完全に秘匿することとされ手紙はパリの米国大使館付武官バーノン・A・ウォールターズ陸軍少将を通じて行なうことになっていた。また手紙には更に必要であればニクソン大統領が代理の高官を会談のためにパリに派遣すると述べてあった。私はこの高官はキッシンジャー博士であることを伝えてよいとの許しを得ていた。私は大統領に会い、報告はキッシンジャーを通じて直接行うべきこと、北京に関する私の役割を絶対に漏してはならないことを言い渡された。

#### ○大統領書翰手交

私はこの書翰を駐仏中国武官范文に手渡そうと苦心した。彼は他の中国大使館員の中でも一番頻繁に顔を合わす人物だった。この時点まで私は中国人を意識もせず話したことはなかった。従って范文に近づくことは容易なことではなかった。このチャンスは思いがけずやってきた。一九七〇年四月二十七日、パリのポーランド大使館で開かれたレセプションを辞して中庭に出たとき、私は何と范文と二人だけで並んでいたのだ。私は彼の方に歩み寄って、彼がフランス語を話すことを知っていたのでフランス語で「アメリカ武官のウォールターズ少将です。私の国の大統領から貴国政府宛のメッセージをここに持っています」と言った。彼はあんぐりと口を開けて私の顔を見た。そして

何か言おうと努力しているかに見えたが何の言葉も出てこなかった。やっと喘ぎながら「お伝えします。お伝えします」と言ったきり、自分のメルセデス・ベンツに飛込んで走り去ってしまった。私はこの失敗をキッシンジャー博士に報告し、自分の間はじっとしているように指示された。

六月十六日私はパリの中華人民共和国大使黄鎮に書翰を手渡すべきメッセージを受け取った。私はパリの繁華街にある中国大使館事務所に行くよりも、パリ郊外の大使公邸に行こうと考え、七月十七日と十八日に足を運んだ。プロレタリアの大使は八時半きっかりにメルセデスの自家用車で出発することが解った。そこで七月十九日朝八時二十分に何の予告もなく公邸園庭に向った扉を押した。

(以下本文冒頭参照)

その時のヘンリー・キッシンジャーのパキスタンから北京への駆歩旅行が丁度発表されたところであつたので、私への指令もこの連絡のためだつたに違いなかつた。

大使公邸の玄関で私は曹貴生と名乗る別の中国人に迎えられた。彼は英語を話した。彼が用件はと促すような顔をしたので私は貴国に宛てたキッシンジャー博士のメッセージを持参した旨を伝えた。彼は私を壁全体を赤い緞子で覆つた純中国式の大きな部屋に招き入れた。

数分後大使が入ってきて、私に警察や報道人に気付かれ

る繁華街にある大使館よりも、公邸を選んだことは賢明な判断だと賛辞をのべた。大使は以前は中国人民解放軍の将官だったので、同じ将官の仲間と話ができるのは嬉しいと語り、メッセージを北京に送ることを約束するとともに、何らかの反応のあることを保障した。大使の中国語をフランス語に通訳したのは魏棟ウイトウであつた。

次に大使に会つたとき、大使は中華人民共和国は会談を行なうことに同意すると回答した。二ヶ国のチャネルとして私を利用する方針についても同意し、更にキッシンジャー博士がパリに来る場合の討議項目を予め報せて欲しいとの申し入れがあつた。私は直ちに特別な暗号を使用してこのことをワシントンに報告した。

#### ○ニクソン大統領訪中

一九七〇年六月十九日初めて黄鎮中国大使に会つてから、私がCIA副長官を予定されてこの役割をディック・ワトソン大使に引き継ぐ迄の九ヶ月間、黄鎮大使との会見は四十六回に及んだ。

この間北ベトナムのレ・ドク・ト代表との秘密会談が平行して行われていた。会談の秘密が洩れることがあればすべては水泡に帰するところから水を漏さない慎重な行動が要求され、パリでこのことを知っていた者は私の他は秘書のナンシー・ウーレットだけだつた。勿論私の訪問がソ連

とか米国のCIA、FBIにも米国陸軍少将が中国大使館で何をしているか目をつけることに対し常に警戒を怠らなかつた。それよりも老練なフランス情報組織がこの事実を把握ことが明らかだったので、この件をフランス情報組織の最高レベルで秘匿して貰うためにポンピドー大統領に依頼してその確認を得た。大統領はその言葉通り実行してくれた。私は一九七一年八月九日、ポンピドー大統領補佐官ミッシェル・ジョベール氏にニクソン大統領訪中と、それに先立つキッシンジャー博士の北京訪問を中国側が受諾したことを伝えた。

詳細なメッセージの交換と連絡の末博士の訪中が行われた。私も中国へ行くことを熱望したが残念ながら結果はそうならなかつた。

何回も黄鎮大使と会う間に軍人同志ということもあって私達の間柄は、大使が私の肩に腕を廻して玄関まで送ってくれる迄になった。十二月二十日の会談の時は、大使がテレビでアゾレス会談でニクソン・ポンピドー両大統領と私と一緒にいるのを見たと言って、私の株は大いに上った。

ニクソン大統領中国訪問の発表は十一月二十九日北京とワシントンで同時に発表された。そして大統領の旅行が順調に進んだことに対する中国側の喜びは新時代の到来として何度も満足の意を表明し、更に大統領への賛辞を惜しま

なかつた。

### ○お別れの晩餐

一九七二年三月十五日、私は中国との会食に出かけた。この日は恐らく私にとって、パリ最後の日といっても良かった。夕食は毛沢東と少数民族を織り込んだつづれ織りの掛った大食堂で行われ、食事は十四品目のコースで、中国の花酒と高級シャトーブリアンだった。大使はスピーチの中で私を古い仲間と呼び「将来事態がどのようになるうとも二人は少なくとも共通の使命を完全に果たしたのだ」。そして大使は私の行先がCIAであることを知って、「ここで忠告しておきたいことはソビエトに要心することだ、非常に危険な国民であることは中国人が良く知っている」と言った。我々は会食の終りに四十七回目の乾杯をした。

いわばゼロから始めた大統領訪中の実現という大勝利に導いた我々の協同作戦は満足すべきものだった。後年退陣したニクソン氏はサクラメントから私に電話をよこし、今度中国に行つて毛沢東を訪問するつもりだがこの門戸を開いてくれた私に先づ報せたかと言ってくれた。彼は毛が生きている間に会い度いと願つて初会見した時、毛は「私は世界一の共産主義者であり、貴方は世界一の反共主義者だ。この二人が結ばれたことは歴史的なことだ」と言つたという言葉を記憶している。(つづく)



## 共産圏動向研究所役員懇 談会記念講演要旨

扇 貞 雄

(共産圏動向研究所長  
共産圏問題評論家)

弊研究所創設の目的はもとより、土居明夫先生（陸軍中  
将）、甲谷悦雄先生（陸軍大佐）の意図を継ぎ、共産圏の  
実態研究とP Rに帰するのでありますが、抑々之が根源は  
陸軍中野学校建学の大神神である、八紘一宇、全世界の民  
をして其の所を得しめるに在りと言うことに基いているの  
であります。

之が為元陸軍中野学校に於ける学生教育の根本は、聖業  
の礎石たる為には、如何なる難業苦業も甘んじて受けんの  
信念に生きる指導官に養成するを必須の要件とし、吾人一  
期一六名と起居を俱にする直接指導官たる区隊長人選には  
軍首悩も種々心を砕かれ、皇軍の精華である関東軍独立守  
備隊に在り各種（紅出会、大刀会、紅槍会等々）匪賊の首  
を斬る事、其の数を知らず、人斬り佐又の異名を以て聞え

る故伊藤佐又大尉が、区隊長として選ばれ、学生達と時を  
同じうして陸軍省に着任、爾来、一年有余月、起居を俱に  
し、兄弟以上の固き団結の中核として研讀したのでありま  
した。

靖国の大祭毎に、前夜起誓文に血盟を交し、当日祭壇に  
奉献し、殉国精神を固めに固め合つたのであります。そし  
て之が伝統は全世界に散つた同期一六名中、只一人昨年病  
没せし同期境兄が学校に残り、学生監の下、次々と生れた  
全八種の学生の学生隊長として、伝統を伝える任に一身を  
献げて呉れたのであります。

戦前、戦中、戦後五〇年変らざる中野建学の大神神を貫  
いて今日の我研究所はあります。

此の度の昭和天皇の御不例に現われた、老幼男女、貧富



貴賤職業を問はざる幾十万の二重橋前に額く民草の姿こそ真の日本人の姿であります。

此の時に於てさえ、あかくが如き、マルクス、レーニン主義のみを至高とし、只革命だけを標榜、無条件、現体制反対、憎悪、闘争のみしか無き恐るべき宗教とも言うべきものこそ吾人は全精力を挙げて、全世界人類の為に之が実態を究明し浄化する為に終生を献げたいと念ずるものであります。

一見文化思想らしく装うマルクスレーニン主義なるものは、究極する所、革命、憎悪、闘争のみを人間に強制する以外に何物もない事を革命後七〇年やうやく世界は気付き初めたのが、ソ連のゴルバチョフによる、「ベレストロイカ」、「グラスノスチ」、路線であり、年々歳々暴露される残酷なる人間無視、人間をして一物質視する根本より発する虐殺の史実の発掘は之を証して余りあるものがあります。(カンボジア、ポーランド、キエフ、シベリア極東地区等々)。

今や世界は戦争と云う、いまわしい、空しい、殺戮の歴史より卒業し、日本の建国の大理想たる全世界の民をして其の処を得しめる共存共栄の方向に否応なしに流れる大潮流となつて来つたと吾人は理解せざるを得ないのであります。そして全世界の人類は一日も早く全世界、一国家

の理想を実現し、共存共栄の世界を作らねばならない大目覚の下に流れつつ有りますが、当然世界一国家の元首盟主たるものが要望される時、人類歴史上最も長い一貫した歴史、血統を継がれた、天皇こそ最も之が象徴たるにふさわしいものであると信ずるのは吾々日本人のみならず、実に外国人であり、有名な相対性原理の生みの親であり、大科学者、大哲学者である、アインシュタイン博士が、幾十年前に「神は東洋の一角日本に世界一国家の元首として盟主として最も相応しい類いなき歴史と血統と伝統を有せられる天皇制と云うものを準備して置いて居た事を感謝する」と喝破して居られるのであります。

吾人は確信を以て世界に遠慮なくアインシュタイン博士の言を反芻し、之が理想実現の為に全身全霊をあげて没頭献身することこそ人類の、中絶、日本人の大責務であると確信する次第であります。

我研究所の究極の目的又此処に帰するのである事を庶幾い、重ねて強調し、本日の記念講演を終る者であります。



## 訪韓団写真(つづき)



板門店「自由の家」の展望台前にて



板門店の「休戦会談場」(窓の外は北鮮軍兵士)



88年4月、オリンピック公園の隣にオープンした「在郷軍人会館」  
(サウナ、温水プール、結婚式場など完備)

## 民族の魂の依りどころ

# 「韓国国立墓地」 紹介

矢部 廣武  
(連盟理事)

韓国の国立墓地は、ソウル金浦空港から車で約三十分の所、銅雀区雀洞にある。三方が小高い丘に囲まれ、前は漢江に臨んで開けていて、さながら野球場のような地形を成している。その総面積は約三十四万坪。境内には緑がふんだんに取り入れられ、水流や池、芝生や並木、花壇や噴水などが所々に配置された一大公園墓地となっている。

当初「国軍墓地」の名称で、朝鮮戦争で亡くなった軍人・軍属をまつる目的をもって、一九五五年七月に現在地に創設された。この場所の選定にあたっては、全国数か所の候補地の中から慎重な検討が行われ、当時の李承晩大統領も、飛行機に乗って上空から視察したといわれる。ここは首都ソウルの中心部に所在し、交通の便・環境共に申し分がない。

翌五六年四月に、毎年六月六日を「顕忠日」と名付けて国の祝祭日の列に加えることが決定され、この日、大統領や閣僚、国会議員、軍の高官などが揃ってここに参拝し、

殉国の英霊に感謝・追悼の祈りを捧げる。この日は全国各地で慰霊の行事が行われ、また各家庭では半旗を掲げて酒や娯楽を慎むなど、全国民が弔意を表する。

国立墓地には、年間を通じて六百万人を超える韓国の国民がここを訪れるほか、韓国に到着した外国の賓客も、国際儀礼に従って空港からまずここに直行し参拝する。

一九六五年に「国立墓地」に昇格し、戦死した軍人・軍属だけでなく、祖国独立のために戦った愛国烈士・警察官や郷土予備軍隊員などもまつられるようになり、さらに故李承晩大統領や故朴正熙大統領夫妻の墓も、ここに設置されるようになった。国立墓地は国防省の管理下にあり、管理所長には、通常、予備役の准将が任ぜられる。

墓域の中心部は、「顕忠門」から「顕忠塔」に至る地域である。顕忠門は、李朝時代初期の宮殿の建物を模して造られており、参拝者はまず、ここに立って姿勢・服装を正す。

顕忠塔までの通路には五メートルの幅で花崗岩が敷きつめられており、その奥に、ひときわ高く顕忠塔が聳え立っている。高官や外国賓客の参拝時には、陸・海・空・海兵の四軍から出された儀仗隊がこの通路の両側に二列横隊に並び、「捧げ銃」の礼をもって迎えてくれる。

顕忠塔には祭壇が設けてあり、その内部には、朝鮮戦争で戦死したが遺体を確認できなかった十三万七千余柱の英霊の位牌が安置されるとともに、氏名を明らかにできなかった五千四百余柱の英霊の遺体が埋葬されている。

参拝者は管理所職員の誘導に従って祭壇の前に進み、代表者が花輪を祭壇の中央に運ぶ。花輪には、例えば「日本郷友連盟訪韓団」のように記名されている。代表者が焼香する。

管理所誘導員の合図によって黙禱する間、儀仗隊員が吹鳴するラッパの音が周囲の丘にこだまして、言うに言われぬ厳肅な気分を醸し出す。その瞬間、今日の韓国の繁栄がここに眠る殉国の英霊たちの貴い犠牲の上に成り立っていること、そして、あの朝鮮戦争での米韓軍の勇戦奮闘が、今日のわが国の繁栄にもつながっていることなどを思い起こさせる。

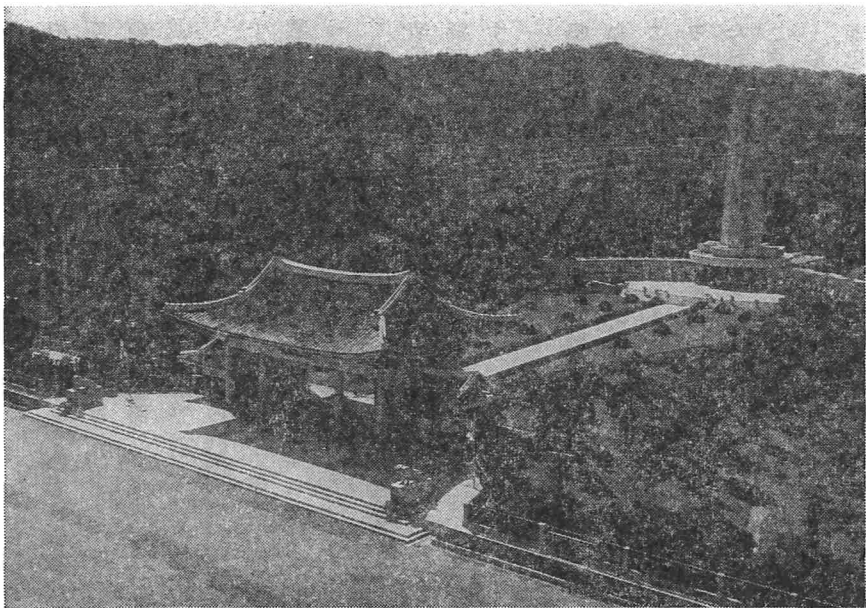
参拝を終えて、再び敷石の通路を通過して退出、代表者は顕忠門の所で記帳する。

一九八八年に、域内に護国教育のための諸施設が設けられた。すなわち、国立墓地紹介の映画を上映する「顕忠館」、写真画報などを展示する「護国館」、戦死者の遺品や敵からの戦利品などを展示する「記念館」などの建物が墓地の入口近くに建設され、これらを利用して一般国民や青少年らに対する愛国教育を行っている。

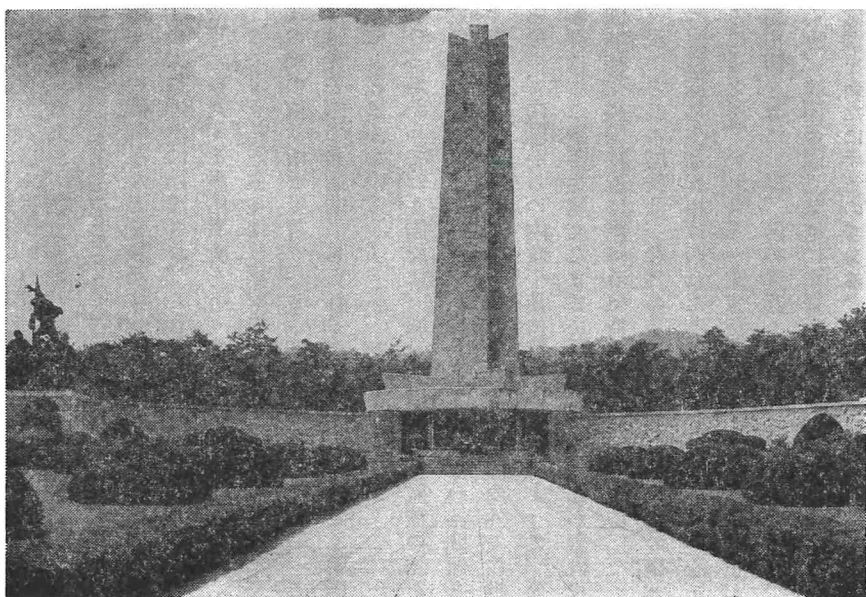
このように慰霊の地は国家によって手厚く保護され、国民の魂の依り所とも言うべき「聖地」となっている。これは世界各国で共通的に見られる事象であり、ひとり韓国のみにとどまらない。

ひるがえってわが国では、戦没者に対して慰霊の誠を捧げるといふ、極く自然な、人類共通の心情が政治問題となっている。靖国神社への首相の公式参拝が国内外での批判を呼び、中国からの内政干渉に等しい抗議によって、公式参拝はここ数年途絶えたままであるし、全国民が素直に靖国神社や護国神社に詣でる気持ちも妨げられている。

私たち日本国民は、今日のわが国の平和と繁栄の礎となつて祖国に生命を捧げられた英霊への追悼と感謝の心を失うことなく、いわゆる「東京裁判史観」を払拭して正しい歴史観を身につけ、国の進路を誤らぬように心すべきである。韓国の国立墓地に参拝するたびに、私はそのような感懐を新たにするのである。



(顯忠門と顯忠塔を含む墓域の中心部)



(顯忠塔を正面に望む)



## 郷土の城 (21)

### 国宝 松本城

佐々木 信四郎

(城郭学者)

西方遥か白銀の峰々北アルプスを背にして、松本平の要地に松本城の国宝天守は聳えている。

四百年近くもよく風雪に耐え、いまま松本のシンボルとして黒い天守の威容を誇っている。

#### 一、松本城の歴史

松本の地は古くは深志とよばれ、松本平の中心にあつて、国府も置かれていた。

南北朝時代には足利尊氏に従つて武功を顕わした小笠原氏が、この地を支配していた。

そして、世は戦国時代へと移つていき、天文十七年(一五四八)甲斐の武田信玄は塩尻峠で小笠原長時と戦い、これを撃破して、信玄はいよいよ本格的に信濃進攻に駒を進めていった。

小笠原氏の本拠林城(松本市)は比高二〇〇呎(標高八五二呎)の山城であるため、信玄はここ深志の地を信濃松

本平経営の本拠と定めて築城し、城下町の発展にも力を入れた。

戦国山城がその戦術拠点であつたいままでの既成概念から脱却して、戦略上のほかに、経済・交通の要地を選び、経済基盤の確立を計るため、平地に築城した先見の戦略家信玄の面目躍如たるものがある。

信玄亡きあとの天正三年(一五七五)長篠の合戦で、武田勝頼は織田・徳川連合軍に敗れ、急速に武田家は衰退して、遂に天正十年三月勝頼は天目山麓田野の地で自刃し、名門武田氏も滅びると、この地は織田信長の支配下に入った。

しかし、その信長も同年六月本能寺で斃れ、この地は北より上杉景勝、東より北条氏政、そして急速に力をつけてきた徳川家康の進出で、戦雲渦巻き麻の如く乱れたが、その中より家康の支援を受けた小笠原貞慶が遂に旧領を回復することができた。

天正十八年（一五九〇）に至り、豊臣秀吉は小田原の北条氏直を滅ぼして、名実ともに天下人に昇りつめると、駿河・遠江・三河・信濃・甲斐五ヶ国の太守家康を江戸に移し、關東二五〇万石を与えた。

このとき小笠原貞慶の子秀政も下総古河二万石に転封され、この地は秀吉の対家康への戦略前衛拠点となった。ここで秀吉は石川数正を和泉より移し、八万石を与えて入部させた。

数正は城の修築にとりかかったが、在城わづかで没し、その子康長が工事を続行して美事な平城を完成した。

現存する天守はこの時代のものである。

## 二、松本城の造営

城は外周を総濠で囲み、本丸天守あたりの水濠は特に巾を広げ、十六世紀末の築城としては珍らしい平城である。

国宝指定の現存天守は文禄年間より着工し、慶長二年（一五九七）頃の完成と推定される。

この天守は大天守・渡櫓・乾小天守、それに辰巳付櫓・月見櫓からなる複合の連結天守である。

月見櫓のみ寄棟造り、他は入母屋造りの瓦葺である。

白塗籠、黒下見板張りであるので、一見黒い天守に見える。

一層目には石落しを設け、各層全てに鉄砲狭間（銃眼）を備え、破風は少なく、武備一辺倒の実戦的な天守である。

なお、辰巳付櫓と月見櫓は世も平穩になった寛永期の改築であって、戦後の解体修理の際の調査によって、石垣は創建当時のものであり、辰巳付櫓と月見櫓のみが改築されたものであることがわかった。

従って武装本意の天守に、風雅な赤漆塗廻縁高欄付、吹き抜けの月見櫓が付随しているのである。

明治の応急修理まで天守は西南に傾いていたため、次のような巷談が伝えられている。

貞享三年（一六八六）年貢の苛酷な取立てに百姓一揆が起り、その主謀者中查加助は磔の刑に処せられた。

加助は天守に向い、恨みをこめてにらむと、そのとき天守が傾いたという。

この謎は昭和二十五年から三十年にかけての解体修理で解けた。

地盤、石垣、建物に欠陥はなく、天守土台を支える十六本の榑の杭が腐朽し、その端部の腐蝕が支持力の均衡を失い、歪曲して傾斜したのであった。

いまはコンクリート杭にして、完全に修復されている。





天守全景（国宝）

左より月見櫓、辰巳付櫓、大天守、渡櫓、乾小天守各所に石落し、狭間を備えた武装天守である。

### 三、近世の松本城

この石川康長も金山奉行大久保長安と縁続きの者として、金山不正の咎を受けて改易されてしまった。

康長の父石川数正はもと家康の家臣で、後に出奔して秀吉のもとに走り、その麾下となったがために、幕府の取潰し政策の犠牲になったのかもしれない。

それに続いて小笠原氏二代（譜代大名、明石へ転封）、戸田氏二代（同）、松平直政（親藩・松江へ転封）、堀田氏（老中、佐倉へ転封）、水野氏六代（譜代、改易）を経て、享保十一年（一七二六）戸田松平光慈が鳥羽より六万石で入封して明治維新まで続いた。

### 四、現在の松本城

現在城趾は公園として整備されて一般に開放され、かつての権威の象徴もいまは静かに観光の名所となって、白鳥の遊ぶ水濠に黒い威容を映している。

城跡は国指定史跡、市指定史跡となり、天守は国宝の指定を受けている。



大天守と渡櫓（国宝）  
長押より下が下見板張りのため黒く壮重である。

# 創立三十周年記念「連盟基金」募集の

## 一段落に際して（御礼）

このたび標記基金の募集をひとまず締切るにあたりまして、開始以来趣旨にご賛同下さつて貴重な浄財を寄せられました多勢の方々のご芳志に対し、更めて心から厚く御礼を申し上げます。

一々ご芳名を掲げて感謝の気持を捧げたところでありますが、紙面の制約により十万円以上ご醸金下さいました方々のご芳名などを掲載させて頂くことといたしました。（順序不同）

（本部扱）

（芳名）	（醸金回数）	（醸金総額）
故 広瀬 栄一殿	(9)	八十万円也
広瀬 和子殿	(1)	万円也
田中 耕二殿	(6)	二百 万円也
星野清三郎殿	(5)	四十五万円也
上妻 正康殿	(3)	三十五万円也
赤羽根 澈殿	(2)	二十万円也

倉岡 愛和殿	(1)	五十万円也	故 松前未曾雄殿	(1)	百 万円也	木村 可縫殿	(1)	十万円也
佐藤 文夫殿	(3)	三十万円也	山本 哲蔵殿	(1)	百 万円也	任田 喜代殿	(1)	三十万円也
柏木 明殿	(1)	十万円也	吉永 治市殿	(1)	八百 万円也	那須 義雄殿	(1)	十万円也
河津幸三郎殿	(1)	十万円也	菊池 光明殿	(1)	十万円也	秋根 昌人殿	(1)	十万円也
梅野 文則殿	(1)	十万円也	中川 勇殿	(1)	十万円也	原田 清玄殿	(1)	十万円也
香取 顕男殿	(1)	十万円也	野元 為輝殿	(1)	十万円也	大塚 道廣殿	(1)	十万円也
味岡 義一殿	(1)	十万円也	野元 すみ殿	(1)	十万円也	森 武次殿	(1)	十万円也
矢部 廣武殿	(1)	十万円也						
神田 八雄殿	(2)	百五十万円也						
有末 精三殿	(4)	四十万円也						
白銀 重二殿	(3)	二十五万円也						
渡部 長作殿	(1)	十万円也						
高品 武彦殿	(1)	十万円也						
吉田 素子殿	(1)	百 万円也						
寺崎 隆治殿	(1)	十万円也						
半井 顕雄殿	(1)	十万円也						
池上 巖殿	(1)	十万円也						
浦 茂殿	(1)	十万円也						
吉田 英一殿	(1)	百 万円也						
杉田 一次殿	(1)	十万円也						
多田 兵庫殿	(1)	十万円也						
草地 貞吾殿	(1)	十万円也						

平城 弘通殿 (1)	百 万円也	高橋 正藏殿 (1)	十 万円也	小笠原 絢殿 (2)	十三万円也
笠原 幸雄殿 (1)	十五万円也	(宮城県支部扱)		飯村アヤエ殿 (2)	二十万円也
河野 省介殿 (1)	十 万円也	島貫 常行殿 (1)	二十万円也	加藤 義秀殿 (1)	十 万円也
矢尾 寿郎殿 (1)	十 万円也	(茨城県支部扱)		富野 ナヲ殿 (1)	二十万円也
故 高田 利種殿 (1)	十 万円也	浅野 芳江殿 (1)	十 万円也	山田 正立殿 (1)	十 万円也
故 保智平八郎殿 (1)	十 万円也	島田 則雄殿 (2)	十五万九千円也	森 健三殿 (1)	十 万円也
故 藤代千枝子殿 (2)	十 万円也	柴田 進殿 (1)	十 万円也	岡本 岩男殿 (3)	二十一万円也
大成建設株式会社殿		丹下 一男殿 (1)	十 万円也	大瀬 登殿 (1)	十 万円也
(8)	百八十万円也	小林 利殿 (2)	十一万円也	(神奈川県支部扱)	
三井信託銀行池袋支店殿		石川 馨殿 (1)	十 万円也	天野 良英殿 (6)	十八万円也
(1)	十 万円也	横山 豊助殿 (2)	十三万円也	生亀 元殿 (1)	十 万円也
東急車輛清掃株式会社殿		佐伯 一彦殿 (1)	十 万円也	三木 正一殿 (2)	十 万円也
(1)	十 万円也	山本 昭伍殿 (1)	十 万円也	平沢 末吉殿 (1)	十 万円也
株式会社竹中工務店殿		根本 衞利殿 (1)	十 万円也	猪瀬 猪作殿 (1)	十 万円也
(1)	十 万円也	根本義三郎殿 (1)	十 万円也	(山梨県支部扱)	
太平洋金属株式会社殿		鈴木 全守殿 (1)	十 万円也	横内 豊殿 (1)	十 万円也
(1)	二十万円也	(千葉県支部扱)		小野 茂計殿 (2)	十一万円也
軍恩連盟全国連合会殿		山本伊三生殿 (1)	二十万円也	(新潟県支部扱)	
(1)	十 万円也	(東京都支部扱)		中山左武郎殿 (1)	十 万円也
第四十七期土橋会殿		有末 精三殿 (1)	十 万円也	弥彦神社殿 (1)	十 万円也
(1)	十 万円也	西郷 從龍殿 (2)	十 万円也	建国記念の日奉祝会殿	
(青森県支部扱)		小林 忠雄殿 (1)	十 万円也	(1)	十 万円也
下山繁十郎殿 (1)	十 万円也	柏 誠四郎殿 (1)	十 万円也	(愛知県支部扱)	
(1)	十 万円也	高山善次郎殿 (1)	十 万円也	近藤 伝六殿 (5)	八十五万円也
(岩手県支部扱)					

穂積 藤雄殿 (1)	十万円也	加藤徳商事株式会社殿(1)	十万円也
安藤 浦吉殿 (1)	十万円也	(三重県支部扱)	
古川為三郎殿 (1)	百 万円也	倉田 文治殿 (1)	十万円也
加藤 幸一殿 (1)	十万円也	(岐阜県支部扱)	
江崎 真澄殿 (1)	十万円也	日東あられ株式会社殿	
海部 俊樹殿 (1)	十万円也	(1)	二十万円也
水谷 彥似殿 (1)	十万円也	(富山県支部扱)	
伊藤 孟殿 (1)	十万円也	瀬川 時造殿 (1)	十万円也
今枝 敬雄殿 (1)	十万円也	古田 勝晴殿 (1)	十二万円也
三愛鋼機株式会社殿(1)	十万円也	(石川県支部扱)	
東邦ガス株式会社殿(1)	十万円也	杉野 勝次殿 (1)	十万円也
株式会社東海銀行本店殿		岡田喜美子殿	十万円也
中部電力株式会社殿(1)	三十万円也	佐々木外幸殿 (3)	十万円也
名古屋鉄道株式会社殿	二十万円也	(福井県支部扱)	
明鋼材株式会社殿 (1)	二十万円也	黒川與志信殿 (1)	十万円也
株式会社大嶽商店殿(1)	十万円也	大橋武太夫殿 (1)	五十万円也
モリソン株式会社殿(1)	十万円也	八木 熊吉殿 (1)	二十万円也
二村化学工業株式会社殿(1)	十万円也	野坂 伊八殿 (1)	十万円也
株式会社松坂屋本店殿(1)	十万円也	宮田 武男殿 (1)	十万円也
株式会社八幡ねじ殿(1)	十万円也	笠原 善修殿 (1)	十万円也
熱田神宮宮庁殿(1)	十五万円也	内田 清之殿 (1)	十万円也
森定興商株式会社殿(1)	十万円也	伊藤 治志殿 (1)	十万円也
		株式会社熊谷組殿(1)	十万円也
		積 善 会殿 (1)	三十万円也
		三谷商事殿 (1)	二十万円也
		福井県建設業連合会殿	
		福井銀行殿 (1)	五十万円也
		福井農協連殿 (1)	二十万円也
		(京都府支部扱)	
		松本 明重殿 (3)	六百 万円也
		白崎 嘉明殿 (1)	十万円也
		(奈良県支部扱)	
		杉田 一次殿 (1)	十万円也
		山下孫八郎殿 (1)	十万円也
		吉村 信治殿 (1)	十万円也
		西口 耀子殿 (1)	十万円也
		辻 善一殿 (1)	十万円也
		中谷 正大殿 (1)	十万円也
		常盤薬品工業株式会社殿	
		(和歌山県支部扱)	
		佐伯 隆平殿 (1)	十万円也
		谷崎栄太郎殿 (1)	十万円也
		(大阪府支部扱)	
		芝田 武治殿 (1)	十万円也
		長江 清市殿 (1)	十万円也
		故 松島 大殿 (1)	十万円也

故 森下 泰殿 (1) 三十万円也

(兵庫県支部扱)  
故 古川 一治殿 (1) 十万円也  
五百藏 新殿 (1) 十万円也  
金井 智殿 (1) 十万円也  
蟹江宗次郎殿 (1) 十万円也  
久保 弘殿 (1) 十万円也  
国吉 章二殿 (2) 十万円也  
グロリー工業株式会社 (1) 十万円也  
姫路皇居奉仕団殿(3) 三十万円也  
神戸市西区皇居奉仕団殿 (2) 二十二万円也

(岡山県支部扱)  
則安 寿雄殿 (1) 十万円也  
(広島県支部扱)  
片山 繁男殿 (4) 二十一万円也  
今中 貞夫殿 (1) 十万円也  
増岡 博之殿 (1) 三十万円也  
(山口県支部扱)  
田中 龍夫殿 (1) 三十万円也  
(愛媛県支部扱)  
長谷川 油殿 (1) 十万円也  
(高知県支部扱)

# 自衛隊だより

## 分離家族の

コミュニケーション

電話は便利だ

三陸佐 鈴木礼治郎  
(駒門・一特連)

遅い夕食を一人で済ませて、見るあてもないテレビをつけたままソファに横たわっている。「リリリ——ン」と電話が鳴った。明日に変わろうという時刻である。

「誰だい、今時分」と面倒くさげに受話器をとると「モシモシ、わたし……」甲高い妻の声である。「もう寝ていたの、まだ十時じゃない……」。バンコクに出張中の妻からである。三カ月ともなればすっかり任地に慣れたとみえて、時差も構わず電話をしてくる。

わが家はただいま、四人の家族がそれぞれ  
の自由意志により、五カ所に生活する分  
離単身生活家庭である。

長女は大学入学以来五年、末娘も福島の大学に行って三年、いずれもなかなか家の方に足を向けない。火の車の家計の足しにと働き出した妻も、今は主婦業免除で、最高とばかり、企業の海外派遣技術指導員として、タイ国に渡っている。残った亭主は、業務管理教育で入校中の管内居住。週末に帰宅して無人のマイホームの管理をする。

こんなことになったのも、元を正せば、容易にマイホームなど持てないわが家の経済状態と転勤族に順応させようと、「これからの人間は、狭い日本での定住などというケチな了見は捨てて、地球を故郷と思つて国際人、いや地球人にならなきゃあ……」などと、勝手な理屈を並べ、転勤に伴う十三年の引越して、子供も小、中学校を五回転校し、転勤、転居を生活の一部と理解し、故郷、母校の定まらない放浪性をすっかり身につけたせいであろうか。こんなバラバラの四人家族がささやかなマイホームに集まるのは年に一度か二度。それも二、三日。それでもそれぞれが、家族のつながりのよりどころは、親父が留守番をするマ

イホームと考えているらしく、土曜日の夜は、それぞれの生活場所からもろもろの伝言、注文、依頼、相談などの電話が殺到する。

暇をもて余している末娘は、きまつて風呂に入っている時だ。「何度電話をしても留守だった」と愚痴った後、探しもの、忘れものの確認、母親からの伝言と断つて、食事上の注意、身だしなみとおせっかいが続き、最後は小遣いの請求。

しばらくすると、外出から帰ったとみえる長女。アパートの引越しの相談、海外旅行、資格試験の書類の取り寄せ依頼、旅行にはお土産代も考えておいて……、また明日の朝電話をするわ……。うなずく度に金が出る話が多い。どうも遊ぶ金と生活費は出所が別と考えているらしい。

さあ、そろそろ寝ようかという頃、先述のように妻からである。郵便はあてにならないから、と週一回国際電話がかかる。切り出しはいつも、隣近所、親類縁者の状況の問い合わせ。近所の女房族の井戸端会議への伝言、料理、掃除の注意、季節の移り変わりに応じた衣類の出し入れ、模様替え

の注文、娘たちの近況と、要求が長々と続く。これらがすべてコレクトコールであるからかなわない。わが家のコミュニケーションは高価である。がしかし、これが現代家庭の一面なのかも知れない。

## 兼業主婦の迷い切る

### 上級陸曹課程に入校して

一陸曹 比屋根暁子

(伊丹・業務隊)

ことしの三月、教育訓練に関する訓令が変わり、第七十六期上級陸曹課程へ第一号の婦人自衛官として、百三十四人の男子隊員に交じり、教育入校しました。

野外訓練の経験に乏しく、また家族の事を思うと、一抹の不安と期待を胸に九月五日、松山駐屯地の四曹教の営門を男子隊員と共にめぐり、時には厳しく、ある時は心を開き親しく語りかけていただいた中隊長、区隊長、助教、同僚の指導、協力と、家族の理解で、無事卒業することができました。

この間、戦闘訓練、野外勤務、戦術教育に、ややもすると憶しがちな気持ちをふる

いたたせ、男子隊員と共に、持てる力の限りを尽くして体当たりをし、その結果、なしとげた充実感、今も脳裏にやきつき生涯忘れられないことのないものとなりました。また、「忙中閑あり」の言葉を心に秘め、「継続は力なり」を合言葉に、朝夕の体力錬成に励んだ結果、体力検定と二ギ走では、自己目標を上回る成果を収める事ができ、満足感でいっぱいです。

短い期間ではありませんでしたが、上級陸曹としての識能を修得し、上級陸曹の何たるかが、また、一自衛官としての在り方がおぼろげながら理解できたように思います。

今後続々と四曹教に入校するであろう婦人自衛官たちの第一歩として、その教育課程を成し遂げた喜びと、自衛官としての責務を胸に、原隊復帰後は部隊において、真に役立つ婦人自衛官として精進努力していきます。

入校間、多くの同僚を得、また、自衛官として、主婦としてリフレッシュすることができ、兼業主婦の迷いもとれ、最後まで婦人自衛官として勤務していける確信がつかめました。松山駐屯地の皆様ありがとうございました。

ございました。

(63・11)

## 緑の下の力持ち

技官 大幸 章一

(滝ヶ原・業務隊管理科)

ポイラー技官として入隊し、半年が過ぎ、やっと仕事にも慣れてきた。入隊当初は自衛隊の仕組みが全くわからず、ましてポイラーなんて、それまで見た事もなく、へたにまわりの物に触れると爆発するんじゃないかと毎日が不安の連続だった。

それが今では二級ポイラー技士の免許を取得(63・9・30交付)し、一人で泊まり運転出来るようになるとは。はつきり言って、ポイラーの仕事は目立つ仕事ではありません。これはポイラーだけでなく、技官全体がそうなのですが、とても地味な仕事です。しかしなくてはならない仕事なのです。

今、僕は、誇りを持って仕事をしていきます。自衛官の皆さんに、より快適に生活してもらえよう、早く一人前の緑の下の力持ちになりたい。

(以上・朝雲)



# 自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(防衛庁航空幕僚監部・二佐)

## 制帽に謝まれッ!

あいつがいた!

皆んなして、本官を川の中にはおり込んだ張本人のあいつが、洗濯物を入れる大きな籠を後の荷台につけたクリーニング屋の自転車に乗り、呑気に口笛など吹きながら、やって来るのである。

これを天佑神助と言わずして、何と言おうか。本官は、その行手に立ちふさがると、ものも言わずにハンドルに手をかけ、あいつもろとも横ひねりに引き倒し、

「オレを、覚えとろうがッ!」  
と大音声。転がったあいつをハッタと睨みつける。

驚いたのは、あいつの方だろう。突然、物陰からものすごい勢いで男が飛び出してきたかと思うと、いきなり自転車ごと引き倒され、地べたにドッシーン。何奴ならんと見上げて見れば、このあいだ仲間と共に、川の中にはおり込んだ。税金ドロポロ。撲られて青アザだらけの顔をしたそいつが、怒りの形相ものすごく、



わず倒れたまま後ずさり。

「ま、待ってくれッ。このあいだは、俺が悪かった。酔ってる皆んなを、けしかけた俺が悪い。このとおり謝まるッ」

「なにッ」

「俺を、撲るなど蹴るなどしてくれ。そのかわり、俺の友達にだけは、手を出さんでくれッ、頼む」

「うーむ……」

必死になって友をかばうあいつの目じりに、小さな青アザがあるのを見て、本官の怒りは少しトーンダウン。

「よおし、それじゃ、皆んなしてオレを叩いたり、川の中にはおり込んだことは、こらえてやる。ばってん、自衛隊の悪口ば言うたことは、まだ許せん。さあ、この帽子に謝まれッ、そこに座って謝まれッ!」

これには、さすがにあいつも、一瞬ためらったようだ。しかし、本官は構わず制帽をあいつの鼻先につきつける。その本官の見事に、あいつは観念したか、地面に座ると、本官の制帽に向かって、深々と頭を下げたのである。

あいつのそんな姿を見ているうちに、本官は身体中が熱くなった。そして、なぜか涙がポロッとこぼれたのである。

(航空自衛隊連合幹部会機関誌「翼」編集者)

## ビルマの花吹雪(1)

森松俊夫

(軍事史研究家)

大きな夢を抱いて

立川武久、彼は野山砲兵科の陸士第53期生である。長身、色白の美男子で、なかなかの豪傑というか、快男児だった。

卒業前に、教練班で作った所感集に彼は「やってみたいこと」と題し、沢山の夢を書きしるしている。

人マネハ大嫌デアル。俺ノ意志ニ従ツテ実行スル。之が一番ヤツテミタイコトデアル。

英ソ両国ヲ戦ハセ、日本ハ南進スベキダ。ソノトキ俺ハ独立任務ニツキ、積極、放胆、企図心、洞察力ヲ發揮シテ活躍シ、死闘何スルモノゾヤダ。(彼は、早くから南進論をとなえていた)

終リニ「やってみたいこと」列記ス  
戦場テ決戦防禦 遭遇戦ノ前衛司令官  
陣地攻撃テ迂回隊長 陣地前カラ敵ノ近

接妨害ヲ行フ山砲兵中隊長 夜間攻撃ノ斥候長・別動隊長

春まだ浅い昭和十五年二月末、陸士を卒業した立川は、従来の台湾山砲兵連隊から第十八師団(菊)山砲兵第十八連隊付となり、相武台をあとにして、中国の広東に赴任、華南の各戦闘に参加した。

大東亜戦争が始ると、まずマレー進攻戦、シンガポール攻略戦、ついでビルマ勘定作戦で活躍、一時、陸軍科学学校在学したのち、再びビルマ戦線に復帰した。

## 立川山砲の奮戦

第十八師団(師団長田中新一中将・菊兵团という)の任務は、北ビルマの維持、すなわち連合軍の中国・インド間ルート打通の破権、第十五軍主力の側背の掩護である。このため師団長は、印度アッサムから進

攻する連合軍の進攻を、フーコン谷地で阻止しつつ、カマイン・モガウン・ミイトキーナを死守する決意であった。

フーコン谷地は「死の谷」といわれるほど人間の生存に適さぬ氣候風土の苛酷な地方である。とくに毎年五月から約半年間の雨季は、作戦行動が至難である。モガウンから、この谷地を通り国境までは、路上約三百軒、谷地幅の広い所で約70軒、狭い所で約20軒内外に達している。

十八年三月の編成改正で、師団の定員は二万五千から約一万五千に減少した。とくに輜重兵連隊の編成が縮小され、山砲兵連隊の連隊段列が解散したことは、師団の輸送力を減少させ、大きな痛手であった。

すなわち多数の兵力が輸送援助、補給点の作業援助等に割られることになり、多くの定数兵器が残置され、牽引用の馬匹も、

彈藥の携行量も極力制限された。

長い雨季が明け、待望の乾季が訪れようとしていた十八年十月末、インド・ビルマ国境を突破して南進してきた連合軍が、突如、わが最前線部隊に攻撃を加えてきた。これを契機とし、じ後、十ヶ月にわたって展開されたフーコン谷地の激闘の幕が切つて落とされたのである。

タナイ河を背にして前進陣地を準備していた歩兵第五十六連隊の部隊は、遠来の連合軍にたいし、猛烈果敢な反撃を繰り返えしつつ、各陣地を固守した。敵は、わが反撃には根気強く耐え、わが方が陣地に就くと、十倍の兵力、数十倍の火力で猛攻を加え、密林内を包圍迂回してわが後方の遮断を図つた。

これにより、前進陣地の守備隊は、二ヶ月の時間を稼いだが、戦力の大半を失つてしまった。

歩兵連隊は、タナイ河南岸の主陣地に就き、敵の半渡に乗じて痛撃する計画であったが、守兵のまばらな陣地であつた。

山砲兵第十八連隊（連隊長・比士平隆男中佐）は、これに直接協同するよう、主陣

地後方に配備した。山砲第一大隊は、左地区内に陣地を占領して射撃準備をととのえ、十九年の正月を迎えた。

立川大尉は、第二中隊長である。

観測所をタナイ河の屈曲部の突端に選び、堅固な掩蓋を設け、河の両側を直視し、砲撃の網の目を張りめぐらして敵の来攻を待つた。

一月二日以降、敵が渡河しようとする、その都度、不意急襲射を浴びせかけた。

ところが、いつの間にか敵部隊が渡河しわが陣地の左翼近くに進出していた。この報に接した師団参謀長は、自ら現地を駆けつけ、この方面の戦闘を指導した。立川中隊は、これに密接な協同を実施した。

新たな歩兵部隊を注入したが、敵を撃退できず、敵は次第に包圍の環を縮めてきた。折り重なつて倒れた日本兵の屍体が、数を増していった。

敵は、速度の遅い観測機を飛ばせ、砲弾が、そのあとをつけてきて、日本軍陣地を破壊した。とくに迫撃砲は密林戦では有効に使用された。いつ、どこから飛んでくるか分らず、瞬時も油断できない。砲兵陣地

も迫撃砲の弾幕射撃で損害を出したが、豪胆な立川中隊長は、沈着冷静な指揮を続けた。

菊師団は、タナイ河畔で、約一ヶ月半の時間を稼いだ。二月十四日夜、撤退を開始し、マインカン陣地に後退した。

敵は、十五日から総攻撃を開始した。タナイ河を突破した敵は、戦車部隊を先頭にして、のべつまくなしの砲爆撃を実施しつつ、マインカン陣地に殺到した。

本道方面を守る歩兵第五十六連隊の陣地は、中隊、小隊ごとに分断され、彼我入り乱れての混戦状態となつた。

田中師団長は、歩兵第五十五連隊を本道の東側に増援し、自ら自決用の手榴弾を身につけ、直接、戦闘を指導した。

立川中隊は、十七日、玉碎寸前の後衛の戦闘に協力したのち脱出した。ところが、このとき歩兵第五十五連隊配属の命を受けた。この命令を実行するには、混乱の極に達した戦場を、左の端から最右翼の部隊のところまで横断するのであるから、砲兵にとつては難事中の至難事であつた。

立川中隊は、配属歩兵小隊を先頭に、砲

は分解して駄載し、密林を踏み分け転進した。幾度か、敵の伏兵に遭い、射撃準備をしたが、努めて戦鬪を避け潜行を続けた。方向を誤り、同じ所をぐるぐる回ることもあった。

ようやく本道東側に到着してみると、戦線はすでに南に移っており、中隊は敵の後方に取り残されていたのである。

中隊長は、今度は東から西へ、再び本道を突破し、マインカン南方に向かい転進した。敵は、続々と、本道沿いに南下中であり、本道西側の密林内は、まだ彼我混戦中であつた。このなかを踏破し、歩兵第五四五連隊の戦鬪に参加した。

三月初め、マインカンの乱戦で大損害を受けた菊兵团は、約二十軒南下したアウチ分水嶺高地付近で頽勢をととのえた。

歩兵大隊に配属された立川中隊は、高地上に絶好の観測所を設け、獲物をねらう鷹のように、敵を待ちうけた。敵が迫撃砲の援護射撃とともに突撃を繰り返しながら押し寄せてくると、立川中隊は、密林にかくされた宿敵の迫撃砲陣地を次々に探索して、これに猛射を加えて撃滅し、歩砲協同

の善戦をつづけた。

これにたいし敵は、航空機による猛爆を加えてきた。中隊長が急降下爆撃の至近弾を受け、壕内に生き埋めになったのを、観測手たちが「隊長掘り」と称して救出したのも、この戦いのときである。

アウチ陣地で約七十日の時間を稼ぎ、五月五日、敵の重囲を破ってワロン高地に後退した。

もうこのころは、弾薬の補給がなく、砲兵として腕のふるいようもなかった。さらに食糧不足と疾病のため、中隊の戦力は急速に低下してしまった。立川大尉もマラリヤと栄養失調による脚気を併発し、歩行するの杖が必要になってきた。

これより先、立川大尉は、四月二十五日付で、第三大隊長を命ぜられていた。この大隊は、鞍馬で牽引する改造三八式野砲六門を装備しており、マインカン脱出の際、密林内で火砲の移動困難なため、自ら救援に向かった尼子大隊長が戦死してしまつたからである。

菊兵团は、左地区隊（歩兵第五十六連隊）をワロン、右地区隊（歩兵第五十五連

隊）を西ワラ、その後方に山砲兵第十八連隊を配備した。立川大隊は、ナンヤセイク三叉路北方に陣地を占領した。しかし、それは形ばかりのものであり、師団の兵数も戦力も、作戦当初の十分の一以下に減少、衰退していた。

五月、北ビルマは、乾季から雨季に転換する時期である。雨季に入る前にと焦る敵の攻勢は、ますます急激になってきた。また、菊兵团後方に進出した敵空挺部隊に補給路を遮断され、兵団の食糧、弾薬の前送はできなくなつてしまった。

このため、第一線將兵のほとんどが栄養失調となり、五月中旬、雨季に入ると、さらに病状が進行し、歩行のできぬ重症患者が多発した。これは大問題である。

田中師団長は「傷病者は一人残らず連れて帰れ。一人でも敵手に委ねてはならぬ」と厳命した。





### 近畿連絡協議会だより

平成元年一月十八日午前十一時より大阪  
 なにわ会館に於て第二十三回定例会を開催  
 ・各府県支部より役員参集・大行陛下の御  
 冥福を祈り黙禱を捧げ開会・佐伯議長の挨拶あり、各府県支部より現況報告等あり懇  
 親会に移り意見交換の中に有意義な定例会  
 を終えた。

### 和歌山県支部だより

二月四日日本県最南端の新宮市に於て第八  
 回北方領土返還要求和歌山県民大会が開催  
 され、本支部も幹事団体として佐伯会長外  
 多数参加し盛大に行われた。

県知事(代理)地元新宮市長、県会議  
 員、周辺各町村長等多数参列し、外交評論  
 家澤英武氏の「ゴルバチョフ書記長の訪日  
 問題と北方領土」の講演を拝聴有意義な大  
 会を終了した。

### 愛知県支部だより

#### 青少年部夏期研修会実施成果報告

昭和六十三年八月三日(水)より五日  
 (金)の間、当支部主催、自衛隊愛知地方  
 連絡部募集事務所の協力により小牧基地に  
 於て実施された防衛講座の研修は、参加青  
 少年部員に対する防衛意識の向揚と共に自  
 衛官募集に対しても絶大な貢献度のあった  
 ことが募集事務所長から寄せられた。

参加者三三名の年齢別内訳は、十三歳一  
 名、十四歳一名、十五歳八名、十六歳七名  
 十八歳八名でその内自衛隊入隊予定関連者  
 は次の通りで注目すべきものがある。

- 一、自衛官採用試験受験者十三名
- 二、入隊確実な者八名
- 三、航空学生三次試験まで至った者一名
- 四、自衛隊生徒受験予定者二名

### 静岡県支部だより

#### 新年役員会実施

暖冬で梅花の便りも聞える一月十七日  
 一月十八日、東海の景勝地焼津市大崩海岸  
 に於て、静岡県郷友連盟新年役員会を開催

した。

平成元年にふさわしく、眼下に駿河湾を  
 一望し、遠く伊豆連山を眺望する会場とな  
 った松風閣は、地元焼津市郷友会役員の中  
 介の労を頂き設営されたもので、参加され  
 た各役員も、景観の会場として、会の進行  
 にも充実感を得られた。

先づスケジュールによって午後三時、昭  
 和天皇崩御に哀悼の意を表し御冥福を祈っ  
 て黙禱を捧げ国民儀礼を終って、執務の時  
 間を割いて特にご臨席を頂いた地元の焼津  
 市長(服部毅一氏)から歓迎のお言葉があ  
 り、混迷の世相に対する所見が述べられて  
 退席され、直ちに村松会長から平成元年静  
 岡県郷友連盟の事業計画となる情勢判断が  
 詳細に渡って述べられ、これに基づき実践  
 事項として具体的に、

- 伝統美風の尊重と継承、歴史の検証。
- 英霊の顕彰、靖国、護国神社への公式  
 参拝の実現。

- 国防理念の確立。
- 各種国民運動への協力参加。
- 青少年部、婦人部の育成強化。
- 軍思活動の基本姿勢。

○広報活動。

○組織内部の整備と会員の拡大。等

具体的実情に照らして、計画の基本理念について説明を行こない役員の諒承を得た。

続いて報告、要談案件として、予算の収

支状況、会費未納入の完納促進、一月二十

日焼津市に於て行こなわれる「北方領土返

還要求県民大会」への積極参加、自衛隊各

種行事への参加仲介等の説明を終つて、今

回特に公務ご繁忙のところ来賓として、終

始会の進行に陪席いただいた自衛隊静岡地

方連絡部長（一等陸佐勝木俊知氏）から自

衛隊の現状と心情として求めたい世論の関

心喚起について迫真に迫る所見が述べられ

参加者一同深い感銘を受けた。

小休憩後席を移し懇親会に入り和やかな

雰囲気の中に自慢のことで「老兵未だ健在

なり」を披露した。

明けて翌朝、伊豆連山から登る日の出の

光景を眺め乍らバイキング食事を済ませ、

平成元年役員会の日程を終了し散会した。

本年度は、常任理事、婦人部長（曾根喜

久江氏）同軍恩婦人担当（三田とし江氏）

等婦人が六人も参加されて席上花を添えた

なお、本年度総会は、偶々静岡市制一〇

〇周年記念事業が数多く計画されており、

会場等の都合で五月十二日（金）県護国神

社（直会殿）で実施することを後日決定し

た。

鳥取県支部だより

一、昭和天皇追悼式の執行

二月六日午前九時より鳥取市白兔会館に

於て郷友会男女会員を主体に日本を守る県

民会議会員と県防衛支部会員など約二百名

参集し追悼式を執行した。

二、追悼式の附帯行事として参議院議員田

村秀昭候補者を招聘して「日本の防衛」と

題する講演会と「世界に輝く昭和」と題す

る映画会を開催した。

三、郷友連盟大会の举行

二月六日午后一時より郷友連盟大会を開

催し平成元年度の事業計画を策定した。

今年度の運動方針は終戦後四十四年も経

過するのに英霊顕彰、特に靖国神社問題が

進展せない為此の問題を第一議として取り

あげたのが大きな特徴である。

（註）奉悼の辞と運動方針は紙面の都合で

次号に掲載します。

（編集部）

郷友基金

名芳者金釀

（通算第48回目）（受付順略）（敬称略）

（本部扱）  
松本孝雄





野島 一良選

武蔵野 鶴間 俊子

初雪に百歳の眉美しき

虚子俳話に『…俳句の如き短い文芸にあつてはその品位という事が大いなる権威を持つ。私等が昔、月並俳句に接した時、先づ品格に欠けてをる事に眉をひそめたものである。それは人の俗情に訴へる事の如何に多いかといふ事であつた。』とあります。この作品は前書きに『奥村土牛』とありましたが土牛画伯の風貌を伝えるのに『初雪』と『百歳の眉』を拉し来り、まことに芽出度く品格高く描写されている。

頬染めて少年帰る冬夕焼

早春や土鈴の淡き面やさし

鉄線花うごき芽吹くと見てをりぬ

岩国 村井 一露

泊船に港更けゆく夜の氷雨

入れ換への貨車斑雪野へ突き放つ

炉の釜の鳴りそめてをり寒牡丹  
雪しろにためらふ牛を引き出せり

牧場でも、また、大きな農家でもよいのであるが、牛舎から折からの雪溶け水の水溜りのある外へ牛を出そうとするが、こんな時牛は、ためらつて出渋るものである。飼主はそれを素き出すのである。この作者珍らしく簡単にすらすらつと描写されて、即ち、鑑賞する側も、ためらいなく、引きつけられる。前句の寒牡丹もそうであるが、この方は『鳴りそめてをり』に時間がこめられている。

松山 重川 兵介

水仙の香につつまれて墓眠る

陶祖の碑囲み春待つ冬桜

菊練りの陶房冬日さんさんと

冬うらら砥部の陶房たづねをり

一連の句、砥部の里を訪られた冬日和が臉に浮んでくる。第一句は他の場所かも知れぬが陶祖の墓かも知れない。

松山 青野 宗紗

捨て蕪菁にもぐら威しに風が鳴る

松山あたりの土龍打は正月十四日であ

ろうか、節分なのであるうか。ともあれ、庭つづきの畑も冬されて抜き捨てられた蕪もある。冬風がこの蕪にも、もぐら威しの藁束にも鳴っている。土龍打の、おそらく子供であるうが、その子供にも鳴っているであろう。捨て蕪菁への著眼が句をひきたてている。

昼しじま七盛塚の落椿

ささめ雪練塀傾ぐ城下町

山の湯に女ばかりの雪見酒

松山 菊地 茂

石鎚がよく見え梅が咲いてをり  
句作りを習ひし余生冬温し

著ぶくれてたのしき余生と思ひをり

老妻の毛絲編む手の細きこと

石鎚は信仰の山でもある。梅咲く頃のおお山は一入神々しく仰がれる。さて作者は俳句において余生が楽しいのである。有難いのである。健康なのである。ふと側らの奥さんに眼がいく。

共に歩んできた日々を憶う、沁みじみとした万感が『手の細きこと』にこめられている。愛情というか、いとしさの情が、渋く詠みあげられている。

千葉 岡田 正秋

無住寺に老の集ひて落葉焚く

無住寺の題目講やもがりぶえ

冬萌の雑草ありて老仕事

鐘楼に鐘なき寺や冬木立

小牧 栗木 栄三

落葉焚き世事巷談を交しをり

前山の明けゆく様子寒稽古

退院ときまりし窓や梅薫る

心筋梗塞で救急車で入院と註記あり。

しかしそれも快方に向い退院の日も決

った安堵が伺える。折ふし窓外の梅花

が薫ってくる。明るい心がよみとれ

る。

柔道着干す若者や建国日

風に彩あれば薄色犬ふぐり

風花に樞をとざす石の音

東京 石井 清勝

観梅の予定日入れしカレンダー

探梅の妻の願ひに一日割く

波の音どこか和らぎ寒明けし

高砂 柳 穆水

寒燈や宿直の椅子きしむ音

着ぶくれて人混む駅に友を待つ

新年会杖を忘れて戻りけり

産土神の雪に足跡残し来し

表札も古りぬ傘寿の春迎ふ

恙ある身に暖冬のおんめぐみ

久々に家に戻りてお屠蘇かな

日当りの良き席得たる梅見かな

鉄塔に働く人よ風花す

和歌山 井本 友敏

御手植の杉よく伸びぬ那智の山

平成の初の豆撒く夜なりけり

春雷に遠きいくさを思いけり

松納め街は素直なたたづまひ

福島 伊藤喜代子

寒灯や娘は二児の母となり

通帳を局に忘れて木の葉髪

佐世保 青山 宇宙

ゆく年の机の上にペンを置く

岩風呂は女ばかりの小正月

梅林の華やぐ里に来りけり

梅香る清閑にあり偕楽園

東京 勝又 正弘

日立 内田 定夫

せせらぎの光りてをりぬ露のとう

方丈や梅の影ある大障子

玉野 三村 白柳

嬰鑠と四代仕へ春立ちぬ

平成となりたる空の武者絵風

久留米 執行みのる

梅咲いて仏舍利塔の聳えたり

層雲峽五階湯殿の雪明り

山口 福井 正坊

父に似し兄の呑みぶり年酒酌む

山の湯のガラス曇りて春浅し

松山 岩崎美代子

如月の山ほのぼのと動き初む

打返す春潮かるき音たてて

春日市 林 藤雄

神苑の琴の調べや寒牡丹

大奥を想はず紅梅大手門

岡山 三田 久代

北の旅軒のつららのなつかしや

大寒の白鳥雛を従へし

岐阜 松野 啓子

北風つよく田の神祀る日なりけり

初暦今年もつよく生きゆかん

松江 大橋新太郎



雪解川きのふの砂洲の跡もなし

仙台 若生 葛旬

切通し道片方は根雪なり

姫路 野村 敬二

寒垢離のお経鋭くきこえけり

富山 城山 暁舟

水仙や九十を越えし母の日々

茨城 高須 湖城

盆梅の蕾ふくらみ初めてをり

金沢 山田 省一

寒の夜や看護婦何か洗ふ音

松山 渡部 力

雪深き庭に来てをりみそさざい

福島 秋葉 紅風

初午や杜の奥から幟立つ

藤枝 渡辺 いつ

坪畑の水仙一輪剪りにけり

東京 藤田 路水

うぶすなの風をつめたし冬ふかく

（おわび）二月号61頁の大関不撓氏作

品は三句のところは原稿の誤りで鑑賞

文のある一句のみ登載、二句脱漏しま

した。ここに三句を改めて載せ、お詫

びします。鑑賞文は省略しました。

横須賀 大関 不撓

逞しきその性が好き石露の花

人の世の事さりげなく小春風

聞え来る天声人語冬日和

〇〇〇〇

近詠

林間に有島邸ある雪景色

雪晴の野にわが影のゆらゆらと

春浅き樹林出で来る馬糞かな

〇〇〇〇

投句締切 毎月十八日必着（翌々月号で発

表）。その季の雑詠五句以内。葉書にわ

かり易い字体で。

宛先 186東京都国立市東二一二十一十六

野島一良宛



森 武次選

福島 伊藤喜代子

春立つと光和みて見ゆれども風は一しほ冷

たかりけり

衣袴着けし凜々しきおのこ豆まけば歓声あ

げて波立つ人垣

層雲の彼方に機影は見えねども轟く爆音は

編隊ならむ

茨城 西野宮武男

復員の名古屋港の一別より四十年経し戦友

いま病みてをりぬ

埼玉 鈴木 幸江

あふむきて落つる点滴なにげなく数数へた

り空白のとき

えびのごと背中まるめて針さされ痛さ極限

髄液とらる

東京 吉岩 藤子

生垣に残る南天美しく朝日にはえて輝くル

ビー

滝雲の映像眺め思ひ出す立山連峰の雄々し

き姿

〇山間の地藏堂への登りみち彼岸花の紅夕

日に燃ゆる

東京 勝又 正弘

〇朝夕に麗峰富士を仰ぎつつ故郷に生れ早

や五十年

吾が手にて掲げし弔旗曇り空区民センタ―

千葉 岡田 正秋

に力なく垂る

明治とも言へる大正に生をうけ喜寿を平成に迎へし吾は

岡山 三田 久代

湯原路の凍てつく朝の山山は樹氷の華に朝

日耀ふ

睦月晴れのすがしき朝の東都よりくつきり

見えし白妙の富士

高知 森下 剛

○今は亡き父黒袍の姿して御幸前導の写し

絵残る

我先に今日ありしこと語るこの姦しき声笑

みて聞く妻

高知 和田 稔

しきりに胸痛むなり待侘びし雨の雫の吊旗

より落つ

○春近み故郷恋ふるか葦の辺に浮寝の鴨の

夜半啼きにけり

高知 別役 重具

この朝みうせ給ひし御光に天地暗く氷雨降

りしく

○悲しみの黒雲重きこの朝すべなくただに

御影おろがむ

高知 弘瀬清一郎

宮川の水嵩増しつつ平成の御代に降りつく

雨の音かも

○平成の御代こそ折れ天つ神国つ御神に御

酒奉る

高知 中田 憲秀

○円か日のまどかならざるとき来て七草

の日をひたすら黙す

大行の御代をば口にするなかれ恐れ多くし

てただもだし居し

高知 古谷 進

○冬枯れの庭のしじまをめじる二羽鳴き交

はしつつかんついばむ

佗助のうすくれなるの花の下をめぐるし

くも目白移りゆく

長崎 荒木あけみ

年金を貰ひ始めて丸二年自分史書くが日々

の楽しみ

宮城 若生 活穂

鬼遣い豆ひとつづつ散る庭に冬との別れ朝

日影見つ

宮城 高橋 覚

流水のはさまに憩ふ小鴨たち人の気配に驚

きて立つ

○春立ちて雪の寒さも残れども鳴き交ふ鶯

に春の香のする

千葉 植弘 親孝

わが身捨て民救はむと敵將の心動かせし大

君神去りぬ

○繁栄の御代にはあれど国守る道なほ遠く

昭和終りぬ

東京 石井 清勝

梅園に沿ふせせらぎの岩々をせきれい一羽

のぼり行きたり

○白梅も紅梅も今日七分咲き造花の妙にし

ばし魅せらる

梅見上げししみ思ふ管公の遠き昔の傷心

の日々

東京 横山 三郎

富士見ゆる諏訪の台地に御在位の記念植樹

の楠高く伸び

大喪の礼にそなへて警備する若き巡查を雨

はうつなり

東京 坂 美貴子

大いなる支へ失ひ虚無感に暮れゆく部屋の

灯ともし得ず

○春の日は七草籠に影おとし次第に萎ゆる

緑葉の敷

年ひとつ重ぬる程に和と愛の絆深まる嫁を

知りたり

前東京 勝又 正弘

やすらぎと風情豊かな古里へ久方ぶりに帰省するなり

岐阜 松田 要二

真帆白帆ゆき交ふ佳景愛でつつもあきれば目を閉じ松嶺の声

兵庫 泉 美牙

寒の雨静かに降りて皇の崩御を悼む国の内外

○ありし日の側近日誌は御心の深さ切々おののきて挿す

昭和の御代終れどながき追憶の果なき日びに心引きしむ

高知 中平 憲白

大寒の室戸路行けば春たけてえんどうの畑も花盛りなり

元旦の朝に妻子と露天風呂岩の合間に山茶花の咲く

東京 石橋 松茂

幾年も花火に開けしボロ市は音自粛して年の瀬越せり

我が妻の喜寿迎へたる誕生日娘は相模よりチュリップ持ち来ぬ

島根 長岡 利勝

○うぶすなの狍犬の頭に積みし雪日当れば湯気立ててしづるる

宍道湖の大き冬波に映りたる茜も間なく消えゆきにけり

籠の中に生きて売らるる寒鮒は黄金の鱗を日に散らしをり

岡山 三村 白柳

トンネルの端恐恐と自転車を通れば激しく車追ひ越す

万歩計腰に付けて七キロを勤めの如く耳鼻科医へ通ふ

悲喜こもごも忘れ得ざりし激動の長き昭和も此処に終りぬ

◎選後小記

○今月は、二七名、九八首のうち、五五首を採った。

○原稿は、毎月一回、十八日迄、直接左記へ。

記

〒214 川崎市多摩区西生田三―二三―三

森 武次宛

◎平成元年短歌教室開催案内

六月十一日(日) 正午より。会場、偕行

社(千代田区九段南四―三―七。J.R市

ヶ谷駅又は地下鉄有楽町線市ヶ谷駅下車五分。靖国通り、京橋、魚勘の間の道路

を東郷坂入る。電話〇三(二六三)〇八五一―三)。二階和室菊の間。詠草一首

(葉書)五月三十一日迄に選者宛。会費二千五百円(昼食代を含む)。出席希望者は必ず葉書にて選者宛申込まれたい。

選者詠 笠山登山(三)

朝の月眼前に在り二時間の散歩仕舞ひて帰りし今も

柗の木のありしこと思ひ出づらだから坂の上に勾へば

とこしへに天津日嗣は絶えせねば御不例なれど年賀を申す

梅干とたくわんを肴に息災と給ひし母の文は忘れず

大君の御平癒祈ると午前五時自宅を出でて笠山に来し

現人は病み給へども煌煌と天津日嗣は照り徹ります

御平癒をひたすら祈り水垢離を取る思ひにて笠山に登る

すべて葉の落ちつくしたる木の間より小川

秩父の町並見ゆる

浮石にあらざることをたしかめて岩角に攀

ず木の根に登る

暗闇に深く潜みし笹一葉刃の如く右眼に刺

さる



大森風来子選

東京都 石井 清勝

厳肅に受けとめている顔でなし

議席数減る訳でない辞任劇

平成が昭和の罪を包み込み

コスモスに顔撫でられて大量死

評||第一句、政治家は言葉だけが先行し

実が伴わないと言っているのだ。その他の

句もリクルートにまつわる政治界に焦点を

あてている。

玉野市 三村 白柳

激動の昭和に長い幕を引く

政治献金へ一線を引く善と悪

大赦令空しく消えた目白ボス

一億円貰うて迷う村おこし

評||昭和と一桁の不況から、戦争へと発展  
敗戦処理・復興、世界に貢献する日本に育  
った長い長い昭和時代にピリオドを打っ  
た。しかし平成時代へどう受けついで行く  
のか少し不安もある。

広島市 坂井 愁山

地球儀はゆっくり春を連れてくる

掛け算と足し算で買う消費税

特級と思わず爛がチンと鳴り

評||どの句もよく出来ているが、掛け算

と足し算の句は、消費税に対する国民の不

安が伺える。第三句、「特級と思わず……」

の句には、その表現と技巧に軍配をあげた

い。

岐阜市 松野 啓子

平成村春日局で岐阜おこし

粗大ゴミに何時でもなれる旦那様

女房は家からはみ出し濡れ羽蝶

定年前やめるに惜しい力出し

職がなく悠々自適とやせ我慢

粗大ゴミ給料日だけはマイペース

原因と経過があつて出す辞表

青森県 西條覚右エ門

爪にマスクが欲しい永田町  
友もみなもしやと思う協力金

千葉県 岡田 正秋

公立私学頭脳と金で選び分け

晩酌も内需拡大喜寿の春

評||この心意気めでたしめでたし。

欠番は平成元年年賀状

岐阜市 松田 要二

地位と金とればあなたに何残る

消費税飲んでも食べても追ってくる

選ばれし賢人かみつく意気に惚れ

参道のいつも気になる六地藏

男でしよ三思四考決然と

国旗買えど日和見族か旗立たず

福島県 五十嵐善一郎

ふるさと創生一億円へ夢をのせ

金うなる世界に貢献日本国

松に鶴竹の下露梅香る

神奈川県 内山 昇

大口を開けた賀状の己がこわい

リクルートどこまで続くぬかるみぞ

鯉育つ協力隊員大瀑布

評||日本青年海外協力隊員がアフリカで

水産養殖に情熱をかける一コマをとらえたもの。

佐世保市 荒木あけみ

湯治場へ妻を見送る小正月

米寿まだ明日の飛躍へ墨をすり

評Ⅱどの句にも鋭い感覚と味がある。

東京都 勝又 正弘

吸いあきて成人式に禁煙す

評Ⅱこんなあべこべの世相を凝視して出来た句である。

技能より糺求める世と変り

P T A会長さんになりたがり

宮城県 若生 勝緒

グリーンフェアおおきな夢を育てあげ

雪に翔べ二十四疊大風よ

印鑑が繁昌している申告期

久留米市 執行 友好

孫の知るメニューの名前我れ知らず

アルバイト遊ぶためかよ食うためか

叱正を一切捨ててて老いの坂

(選後に) 熱心な皆さまのご投句に接し

何時も身をひきしめて選句にあたっていま

す。そして何時も思うことながら、作品の上で、はっきりと所信を述べることも大切

であるが、しかしそれよりも、これを鑑賞する人に勝手に結論を出されるような余白を残しておくことも、高度なテクニクであることも知ってほしい。

投句は、はがきで五句、毎月十八日まで

に左記へ。

701-42岡山県邑久郡邑久町山手 選者宛

(柳友柳壇と明記)

## 御 礼

ご承知のとおり、二月は二十四日(金)

が「大喪の礼」のため休日と成り、二十六日

(日)迄思いがけない三連休となり、それ

に二月は二十八日(火)迄しかない一番短

い月であったため、また選者の先生方に特

にお願ひして、夫々の締め切り日にかかわ

らず二十二日(水)迄に選を終了した原稿

のご送付を懇願しましたところ、無理なお

願ひをお聞き届け賜わり、早きは二十一日

迄に速達を以てお送り頂き本当に有難うご

ざいました。誌上にて深謝申し上げます。

他の原稿の締め切りは総て月の二十日と

成って居りますが、俳壇・歌壇・柳壇だけは成るべく作った時と発表の時を一日でも近くするため、ぎりぎりの二十三日を締切日に致しております。従ってこの原稿が一日でも遅れますと誌の出来上りに思いがけない支障を生じ、発行日が遅れる結果となり購読者のきついお叱りを受けることとなります。編集者の尤も苦慮するところであります。

そんな次第の前にもお願い致しましたとおり、選者からの締め切り日である二十三日が、土、日、祭日等に該当する月には、投稿者の皆様も十八日の締め切り日にかかわらず早目にご投稿願ひ、又、選者の先生方におかれても早目に選を終えられ最悪の場合でも二十二日午前中には当方に必着するよう特別のご配慮を懇願する次第であります。

申す迄もなく、どんな原稿でも一〇〇%完全と云うものではなく、どうしても二、三回目を通し誤りを正す必要があります。そのためぎりぎりでは手の施す術がありません。ご賢察賜わりたく存じます。

## 編集後記

◎去る三月実施された全国総会に於て、広瀬会長ご逝去後欠となって居りました新会長が選任されました。

新会長が就任の挨拶に於て明示された方針に従って、会員一同、一致団結して、崇高な連盟の使命達成に一路邁進せねばならぬと痛感します。

◎同じく総会に於て、平成元年度の「事業計画」が決定されました。

連盟が本年度に実施しようとする事業の実態が、内外状況の見透し、分析と共に細大となく明示されております。

その全文を本誌に掲載する予定でありましたが、紙面の都合で次の六月号に掲載致します。

◎郷友基金の募金については、各方面、多数の方々の積極的なご芳志を頂戴しました。募金について大変ご苦労された、支部の方々の並々ならぬご活躍と共に、ここに更めて厚く御礼を申し上げます。

その都度郷友誌に掲載し、謝意の一端を表したところでありますが、今回更めて、

十万円以上の大口募金者のご芳名を再掲載して、せめてもの感謝の誠を現わしたいと思います。本当に有難うございました。

◎矢部廣武副理事長の「韓国国立墓地」の紹介は、一向に進転を見ない、我が国の「靖国問題」に対する頂門の一針たらんとするものであります。

他山の石として「靖国問題」啓蒙の資として頂きたいと念願します。今更ら申すまでもなく「靖国問題」が、そのあるべき正しい姿に於て解決しない限り、未だ戦後は終らないし、又、我が国の将来は亡国の道を歩むものと憂慮されます。

◎三月の人事改選で名誉顧問となられた「日本世界戦略フォーラム」会長の杉田一次先生から久々に玉稿のご協力を賜わりました。

我が国の国家安全保障に関する政治家への切実な提言であります。先生が戦後今日迄機会ある毎に叫び続けて来られた、欠陥だらけの我が国家安全保障体系の実態とその在るべき姿を詳細具体的に分析検討された集大成とも申すべき貴重な内容でありまして、苟も我が国の安全保障を論ずる者の

見逃すことの出来ない珠玉編であります。熟読をお願いします。

この種の論文は全編一気に掲載することが望ましく、分載は迫力を欠き極めて遺憾の事ではありますが、何分にも僅か六八頁の小冊子、それに本号は記事輻湊のため、已むなく三回に分載致した次第、悪しからずご諒承賜わりたくと存じます。

## 郷友

(第三十五卷第四号)  
通巻第四百十号

発行兼編集人 赤羽根 徹とほら  
発行所 社団法人日本郷友連盟

〒一六〇 東京都新宿区若葉一丁目二十一番地  
電話(34) 四三八六

(33) 二三四一・二三四二  
毎月一回一日発行

定価・一部二百六十円(送料共)  
振替口座・東京四一七一八七七  
印刷所 共同印刷株式会社

〒一一二 東京都文京区小石川四の十四の十二  
電話・案内台(817) 二二一一

# 帝国陸軍編制総覧

元大本営参謀 井本熊男 監修  
元防衛庁戦史編纂官 森松俊夫(前篇)  
戦史研究家 外山操(後篇)  
上法快男(企画)  
四六判上製皮装  
／函入り／本文  
一五〇〇頁／定  
価七〇、〇〇〇円

■明治建軍以来の陸軍編制の変遷を七つの時代区分で概観(編制史概説) ■官衙、軍隊、学校、特務機関等の編制と主要人事を網羅(中央官衙は課長級以上の、軍隊は聯隊・独立大隊以上の司令官、師団長、団隊長、幕僚等の氏名を記載) ■戦闘序列を重視した構成で、編制史や戦争史のダイナミズムを表現する画期的な方法を採用 ■常備部隊配備表、平常編制と戦時編制の区分図など豊富な図表掲載 ■官衙・軍隊・学校・特務機関別の索引作成 ■本天金使用・美装上製本

## 最新刊 陸軍オールド部隊名鑑

芙蓉書房出版編 郷土の榮譽を担い、国運の隆盛に寄与した陸軍部隊総数約一万の詳細なメモリアル! 2800円

## 秘境西域八年の潜行

西川一三著 TBS放映絶賛の新世界紀行「秘境西域六千キロ大探険」の原本 上下各3000円／別巻2500円

## 陸海軍将官人事総覧 陸軍篇全二巻

上法快男監修 陸軍篇(陸士四十五期迄) 15000円  
外山操 海軍篇(海兵五十八期迄) 13000円  
全将官及び主要軍人の履歴を年月日迄収録した大資料!

## 芙蓉書房出版

文京区弥生2-1-11 ☎03-813-4466  
振替 東京6-351361 出版目録無料送呈

初回は切手300円で見本誌を送ります。

実物交換会誌

# 旧日本陸軍・海軍 実物 軍装品

■出品500点以上 ■定価500円 ■10日発行

戦中の木竹自転車・戦後のジュラルミン自転車  
犬養毅(木堂)関係品、特別高価買い受けます。

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します

交換誌 檻らんる 樓 “S”係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15  
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383



4 月のお料理

炊きあわせ

堀江泰子（料理研究家）



春らしい炊き合わせです。

肉団子のとり挽を半量からいりしてあるので、肉がしまらず、やわらかです。  
高野豆腐は製造年月日を見て新しいものを。

材 料

とりひき肉……300 g  
 みりん……小さじ1  
 しょうゆ……小さじ1  
 卵……小1コ  
 片栗粉……小さじ2  
 生姜みじん切り…少々  
 だし汁…… $\frac{1}{2}$ カップ  
 砂糖……大さじ2  
 しょうゆ…大さじ2½~3  
 みりん……大さじ2

作り方

- ①ひき肉½量にみりん、しょうゆを加えて混ぜからいりし、すり鉢でする。
- ②①に残りのひき肉と卵をよく混ぜ、生姜みじん切り、片栗粉を入れて混ぜる。
- ③鍋に出汁、砂糖、みりん、しょうゆを加えて煮たて、②のとりひきをつくねにまとめながら加えて煮、裏側が煮えたらうらがえし、煮汁がなくなるまで煮、最後に火を強め汁をからめる。